

昭和十年五月廿日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年二月廿日印刷納本・昭和十七年三月一日發行

第八卷 第三號

淨

土



號

月

三

陸海軍 慰問浄土 病

全國の陸海軍病院に月々新刊の信仰雜誌「浄土」を贈つて白衣の勇士の方々に法味を愛樂して頂くために、この運動を始めてから既に三ヶ年になりました。その間全國津々浦々から赤誠の籠つた御援助を頂き既に七千數百圓余の御寄附が集りました。延數にして十二萬餘冊の浄土があらゆる軍病院に贈られ、勇士の方々から大變よろこばれてをります。多數の感謝の言葉が寄せられました。その意義については最早贅言を要せぬこの聖なる運動にはなほ多數の御参加をお願い致します。

白衣の勇士に法味を捧げよ

- ◆全國陸海軍病院の全部へ毎月三十部乃至百部の雜誌「浄土」を贈呈して白衣の勇士達に法味を捧げてをります。
- ◆一口一圓二十錢の浄財を御喜捨下さい。それによつて一年間毎月雜誌が病院へ参ります。
- ◆毎月五千部以上は是非入用です。少くも五千人の有志者が必要です。御奮發下さい。
- ◆個人でも、團體でも、亦金高が一口以下でも結構です。兎も角この聖き運動に隨喜參加して下さい。
- ◆御送金は浄土宗務所事變部宛に！ 領收の證には宗報誌上及び「浄土」に御芳名を掲載します。

三月號 目次

表紙・扉・目次カッ

支那人の心理と信仰

鈴木金平 (六)

雪の日抄

吉田絃二郎 (三)

南無阿彌陀佛の心

佐藤春夫 (四)

先師を語る 渡邊海旭先生

増谷文雄 (二)

婦人感 衣類の切符制

生田花世 (六)

春の椿

貴司山治 (三)

馬來半島の民族と宗教

中村康隆 (一)

隨筆一 富士

中野尅子 (四)

淨土隣組座談會

(一)

信仰 相談

中村辨康 (四)

まん畫 米英敗戰記錄

漫畫 協團 (一)

歌壇

與謝野晶子選 (九)

俳壇

太田耳動子選 (七)

元祖大師四十八靈場

巡拜 順路記

中川大仙 (四)

法語解説 易行道から死生達觀へ

中村辨康 (五)

會のたより

(五)

編輯後記

(七)



中村 辨康 著

新 刊

日常勤行式講讀

B 6 版二百四十頁
價 一圓五十錢
送 料 十 錢

！來出よいよい書の望待
侶伴好養修の携必徒宗土淨

◇本誌に連載し、好評を博した信仰の入門書！◇
◇座右に備へて日常勤行の深意を味得せられよ！◇

淨土宗でいつもお勤めしてゐるお經文に一々懇切な解説がついてゐます。即ち一々のお經文について和譯と意譯をあげ、それに字解までつけて誰にでも解るやうにして、更に著者の燃ゆる信念から湧き出た解説がついてゐます。従つて單なる解説ではなくて誰にも喜ばれる信仰の入門書です。會員各位の修養に、僧侶各位の參考資料と説教その他の教材に最適です。

發行所 法 然 上 人 鑽 仰 會

東京市芝區芝公園明照會館
振替 東京 八二一八七番

淨土 三月號

われ淨土宗をたつる心は、凡夫の報土にむまるゝことを、しめさんがためなり。

淨土一宗の諸宗に越え、念佛一行の、諸行にすぐれたりといふ事は、萬機を攝するかたを言ふなり。

法然上人御法語



南無阿彌陀佛の心

佐藤 春 夫

皇軍の強さのなかには日露戦争以來發達して來た優秀な科學や、この優秀な兵器を有効に操るための猛訓練など數へて來るとさまざまな内容が包まれてゐるのに氣づくが、その精神的な面では絶対服従の淨土教の心が大きな役割をしてゐると思ふ。

現實に直面してその認識の上で、苦痛を堪へ忍ぶ精神を自分は淨土教の心、南無阿彌陀佛の心と呼ぶのである。それはあきらめといふやうな消極的なものとは大に違つてゐる。從來日本人の心情の特色として「あきらめ」を言ふ人が多かつたが、それも「あきらめ」ではなく「南無阿彌陀佛の心」をあきらめと混同してゐたのであらう。なるほどこの二つは一見似てゐるが根底では大へん區別のあるものである。その區別はどの點にあるか。あきらめはどこまでも悲觀的なものであるが「南無阿彌陀佛の心」は常に楽しい希望を將來に抱きそれ故刻々の苦痛を喜んで堪える力を持つてゐるものである。あきらめは頽廢的な不健康な精神状態だけれども「南無阿彌陀佛の心」は健康な生活者の心である。その心の底に信仰による希望があるがためである。

この間ある座談會に出たら席上の一人が「大東亞戦争を通して日本人の精神を考へるとその間に終始し、また上下一貫して、忍苦の心が表はれてゐるののはつきりわかる——所謂 ABCD 包圍陣に對する忍耐、それを突破しようとする外交精神の極度な忍耐、戦線の勇士たちが種々の苦痛に堪えてゐる状態



は申すに及ばず、銃後の生活のなかにも忍苦の相が事毎に現はれてゐるではないか」といふのであつた。自分はこの觀察に賛成し敬意を表するものである。しかしこの忍苦の精神といふ言葉を自分の所謂「南無阿彌陀佛の心」に置きかへて考へて見たら更によからうと思ふ。

大東亞の建設といふ大きな希望。すなはち肇國以來三千年の民族の理想が現在實現の第一歩に入つたといふこの樂しみと、現人神に對し奉る信仰とによつていかなる痛苦にも堪えようとする心構へを常に持つたわが民族の實情を夙に察して淨土教の教を開いた上人こそ民族の性情を悉く知り盡してゐたといふべきである。と今更に上人の智に服せざるを得ない。それにつけても現代われわれは戦争が優秀な科學兵器に負ふところが多い事實にのみ注目する結果、一にも科學二にも科學を謳歌する風潮の生じつつある俗論の傾向に鑑み、科學精神とはちと縁の遠いと思はれるかも知れない我々の「南無阿彌陀佛の心」の眞意義を明かにし、それが時局下にどんな作用をしてゐるかを考へてみた。自分は格別科學謳歌に反對ではないが、その隆盛に對抗して、民族の精神力を一層強化することも無駄事でないと思つた。につけては、淨土教の諸氏がこの際一層發奮してその信仰の面から報國の實を擧げてほしいと念する。愚見を以てすると、日本精神といふものは一に盡忠の精神——所謂歸一せんとする心と、二に風雅の心、みやび心、すなはち自然と人間社會との間に大きな調利を發見してこれを喜び樂まうとするゆとり心と、第三に今まで述べた「南無阿彌陀佛の心」とであると思ふ。この三つのものが日本民族の日常生活にしみ通つてゐる傳統的な精神であらう。それが平常われわれの生活に必要なことは日頃から知らないではなかつたがただ平和の時にのみ役に立つのではない、この非常時に當つて非常時らしい役に立ち方で間に合ふものであることを知つたのは非常に喜ばしい。

お互に我々の「南無阿彌陀佛の心」を更に深め強め確めつつ、この心が日本民族ばかりでなく、大東亞の精神になる日を豫想してそれにそなへるための用意も必要であらう。





支那人の心理と信仰

大村 桂 嚴

私は昨秋九月八日神戸出帆、船中で四泊し、十二日の朝塘沽港に着き其日すぐ仁川を素通りして北京に入つた。それから四十日を北支、蒙疆、滿洲熱河の承德等を旅行して、十月二十四日に復た塘沽から往きと同じ航路を通じて二十八日の夕刻神戸に歸港した。

私は十四年の春も四月五月の兩月に亘つてやはり五十日程中支旅行をしたので、支那大陸といふものゝ大體はもうわかつてゐた。併し廣い支那大陸の北と南とは色々の異風異習があつて、一口に支那といつてしまふことは出来ない。私は北支で、北京、天津、通州、太原、石門(石家莊)、蒙疆では張家口と大同、滿洲は熱河の承德等を旅行した。又滿洲の方

は昭和十年に一度旅行してゐるので大體わかつてゐる。滿洲と支那とは元々同じ國內であつたので殆ど其生活振りは變らぬ。

それから支那でも色々の人に會ひ色々の話を聞いた。北京の三井物産支店の岡本さんは四十年から北支に居る人だ。又天津の支店の齊藤さんは二十年北支にゐる人である。この人々からも色々の經驗談を聞いたが、こんな風で随分支那通の人も多いものだ。そんな人の話が私の旅囊を随分ふくらましてくれた。何分支那は四千年以上の古い國であり、又文化も其間に色々と發達してゐるので、聞くものを見るもの仲々珍しいものが多い。今こゝにはほんの一部分だけ而かも宗教殊に佛教

に關する二三點を述べようと思ふ。

○

第一は、支那人の心持、或は性質といはんか性格といはんか、全體支那人は正直か、親切かといふこと、是れには日本人の中でも色々に言つてゐる。支那人を善い方に見てゐる人と惡い方に見てゐる人がある。だから一寸旅行した私等には仲々真相は分らない。が私等の見る所では、根は惡くはないと思ふ。

從來、支那人はうそつきだ、狸だといふ風に言はれてゐるのをよく聞いた。しかしさうばかりも言へない。尤も支那といふ國は、昔から戦亂止まず掠奪盜難で下の者は常に虐げられて許りある。天下が平定せられると又い

つも宮殿の建築や城廓建築の大家木大工事が始まつて處げられる。支那の民衆は傳統的にいちめぬかれてゐるから、人と見たら泥棒と思へといふ風に、自分等の家族、親戚の外は信用が出来ないと思つてゐる。故に支那の家屋の建築を見ればこれがすぐわかる。實に要害堅固にしてあつてどこからも入れないやうになつてゐる。日本でも都會はさうだが地方へ行くと實に吞氣なもので戸締りなんかも十分にしないで安心して寝てゐるが、支那ではさうではない。家屋外には泥棒と思つてゐる。こんな風だから他人殊に他國人に對しては一往も二往も疑ひの眼を以て見るのは當り前である。けれども根はさうでない。個人的に交際を續け兄弟の盃でもする間柄となると命を懸けて親切にする。日本人に於ける兄弟分の盃した古來の傳統と異らないといふことである。これはどこかに儒教の仁義の精神が流れてゐるからであらう。

一般民衆は餘り教育を受けてゐないけれども社會の自然の教育とでもいはんか、やはり

支那道德の傳統は受けて居るらしい。それに佛教の感化も仲々根柢深く入り込んでゐる。

道教も廣く深く浸み込んでゐる。又道教と佛教とは混合されて強い民間の信仰となつてゐる。是等の宗教信仰が支那人の精神のどこかに流れてゐるからそんなに支那人を狸あつかひにする必要はない。こちらが親切にして行けば向ふも感ずるやうになるのである。

北支即ち華北の宗教調査が完成して昨年丁度私の行つてゐる間に發表せられたがそれによると、華北人民の八十パーセントまでは佛教教徒である。二十パーセントだけが其他の色々の宗教信徒となつてゐる。尤もこの佛教信徒の八十パーセントの中には名ばかりの信者もあるらしい。殆ど無宗教に近い者もある。しかしそれでもちやんと佛教徒として出てゐるのだから全然無關係ではない。やはり佛教徒と言つてよいわけだ。さうして其佛教徒といふのは殆ど九分九厘までが、南無阿彌陀佛と南無觀世音である。支那には日本のやうに八宗九宗の區別はない。まあ念佛に座

禪に觀法、此三つが混合されて行はれてゐる。その何れかに幾らか餘計傾いてゐる寺がある。浄土宗とか禪宗とか天台宗といふ風に、日本人には見られてゐるので支那人自身にはそんな宗旨の別は考へてゐない。どの寺でも南無阿彌陀佛と南無觀世音である。殊に一般民衆の信仰はこの外にない。だから南無阿彌陀佛で行けば親密に話し合ひつき合ふことがわかる。上は政界の要人でも大實業家、將軍連から下は誰でも南無阿彌陀佛の宗教を以て交れば和氣諱々として話が出来る。これは私の實際経験したことであるからはずきり言へる。此點は國を擧げて日本よりも宗教的であるのである。

○

私は北京では興亜院の紹介で代表的の寺院三箇寺に參詣した。拈花寺、廣濟寺、量源寺である。何れも大寺で僧侶は四五十人づゝゐた。どの寺でも住職自ら案内してくれて、非常に親切にもなしてくれた。少しもわだかまりがなく全く十年の知己、百年の法友とい

ふ感じがした。宗教の交りといふものは本當によいものだといふ感じをひし／＼と味つた。敵性根性といふものを少しも持たず少しも感ぜずに、腹の底から氣持よく樂々と話合ひつき合ふことが出来る。これを私は實感して本當に嬉しく思つた。此三箇寺の住職は何れも北京では勿論北支又全支那に於ての高僧であり學德兼備の名僧である。會つてゐて誠に善い感じがした。佛教の學行の出來た人は人種の異同や民族の如何を問はず、同じく釋尊の同門であり念佛の同行であるといふことをあり／＼と實感することが出來た。

拈花寺では授戒會の最中で二三百人の比較的若い僧侶が集つて來てゐた。是等の青年僧が本堂前の廣場の青天井の下で一齊に禮拜をしてゐた。尤も此廣場には瓦が敷き詰めてあつて、きれいに掃除はしてあるのだが、屋外の露天での大衆の讀經禮拜であるから實に勇壯で嚴肅で大きな宗教味を味ふことの出來たのを今でも忘れられぬ。又廣濟寺では三三五五と幾組かの老若男女の信者が參詣してゐ

た。それは淺草觀音や増上寺などへ見物かたがたちらほら參つてゐるといふのと違つて、それ／＼の堂の内へ入つて神妙に念佛したり座禪したりしてゐるのである。多くは相當な身分の人々であつた。若い令嬢、インテリの青年婦人といふのも幾らも見受けた。中には女で法衣を着てゐたのもあつた。これは婦人の居士である。日本で言へば、五重相傳を受けた篤信の信者といふ所であらう。僧侶に對する尊敬の念の厚いこと禮儀の丁寧なことなども感心せしめられた。

私は淨土宗の中島正義さんと二人で行つたのだが、私等に對しても一々丁寧に點禮してゐた。量源寺では一度にお葬式が七つ程來たのに出喰はした。大體支那の一般民家では一々お葬式には坊さんを頼まぬ。親類縁者だけで告別式をして野邊へ送るのであるが、此寺は大寺であるからよい檀家も澤山あるのだから、一度に七つも葬式が來た。大寺で僧侶が五六十人もゐるから此葬式は同時にあちらこちらの堂で行はれた。あちらでもこちらで

も鐘、太鼓の音や讀經の聲がしてゐた。兎に角、私はどこでも難有く感じて歸つて來た。此他私はラマ寺の擁和宮にも參つた。こゝでは佛教講習會の最中で道俗三百人程の人が集つて來てゐた。マイクロホン附で講義があり聽衆は皆銘々書物を前にひろげて熱心に聽講してゐた。かく何所でも仲々佛教に熱心な様子を見て支那には仲々佛教の勢力の衰へてゐないことを知つた。支那の居士林といふのは在家の人の佛教信者又は佛教研究者の團體であるが、これが又仲々僧侶をまかす位の勢力で日本には一寸見られない宗教界の一現象でこれが政治や實業色々の中へ浸み通つて行つてゐるのである。だから支那では或は日本も及ばぬ位、宗教即ち佛教の教化力が國政の中へ、又民衆の日常生活の中へ這入り込んでゐるのである。故に支那を知らんとする人、支那人の心理を知らんとする人は是等の宗教方面、殊に佛教の一般生活に及ぼしてゐる一寸表面だけではわからぬ内生力を研究し透見する必要があるのである。

歌

壇

與謝野
晶子選

京都市 葉山 千高

おほみこと降し給へる十二月八日
の日記よ書くこと盡さず

評 米英の暴に對して宣戰の大詔は密雲を
破る天日の如くあきらかに下された。
これを拜讀した一億國民は、泣き、奮
ひ起ち一人として大君のため死なうと
思はぬものはなかつたのである。作善もまた
國民の感激發露である。これ作善もまた
日記に感激の言葉をこまごまと記され
たことであらう。

秋田市 妹尾馬之助

今ぞ知るいのちも何も惜しからん
ただ大君にささげまつらん

評 起つべき秋が遂に來た。國民はわが國
體の尊貴を知り祖先の精神を今こそそ
の體內に感ずると波打たせて土氣の昂揚
前に比類を見ない程である。この大御
代に生れ、この大事業に参加し得る感
激の中に死んでもよいと思つてゐる。

奈良縣 寺田 惟牛

みいくさは勝ちに勝ちたれその蔭
の英靈思ひ手を合せ泣く

評 諸戰以來海に陸に皇軍の進むところを
見よ、赫々の勳は世界を震目させ、敵を
狼狽の極に陥れてゐるではないか。
しかしその功の蔭に幾多の殉國の士の
あることを銘記してこの作善は手を合
せてゐるのである。

勝ちきほふ戰に心たかぶりて胸い
たきかな傷痕のわれは

愛知縣 寺田 馬美

高野山のぼりて見れば浪のごとつ
らなる峯に雲のたなびく

北海道 由利 博

大君に捧げんいのちながらへて北
の國なる初日をろがむ

北海道 金石 正夫

傷つきて病舎に身をば置く今も銃
とる意氣はなど衰へん

東京市 小泉 妙春

かへり見てことたらはねど一年の
今日の終りの心のどけし

北海道 前野 賢一郎

初春や病めるわれをも慰めて爲替
を賜ふ老いし親より

茨城縣 露木 謙太郎

仄かなる香を放ちつつ茶の花の寂
しささそふ寺の庭かな

奈良縣 水谷 良子

たしなみし煙草を斷ちてわれ祈る

この大御代のゆゆしき春を
越えゆけば山はつづきぬ青雲を天
のかなたに望むのみにて

宮城縣 菅原 仁廣

さし昇る初日をうけて消えにけり
峰より峰にかかる浮雲

愛知縣 明 月

戦を宣し給ひて大東亜ひらけゆ
くなりあかつきのごと

朝鮮 三浦 敏子

幾度かいさかひもせし君ゆゑに思
ひ出多く死ねば泣かるる

大坂市 中島 悦子

ふるさとの露草深きおくつきに眠
れる吾兒の旅路安かれ

京都市 竹内 はじめ

さらさらと崖の粉雪を撫でやりつ
逢ひはぐれたる心寂しき

北海道 山本 由馬

久々にたゆさを忍び筆とりて恙な
きよと親に告ぐかな

中支戦線 三 在 誠 藏

砲音の絶えてしづけき塹壕に故郷
の母を語る戦友

栃木縣 大輪 玄海

國のため柱となりし靈むかふ人の
瞳は皆濡れてあぬ

東京 伊藤 政藏

月影は身にしみじみと永よりつめ
たく地には霜白きかな

京都市 黒野 昭善

山寺の冬は寂しや人もなく泉の音
と共に歌よむ

熊本縣 五野 一之

大東亜地圖ぬり替へて新しき秩序
と平和来る日近し

北海道 花田 順往

大君の大御心にかなひなば神も佛
も守りますすらん

東京市 押野 尚秀

死の際も父と母とへお愛想にバア
などをして見せし兒なりき

長野縣 丸山 力園

常會に隠し藝をも披露して共に樂
しむ戦時下の夜

京都市 福島 幸治郎

うつし世ははてなく悲しはらから
の頼めるものの逝ける日に逢ふ

福岡縣 西山 博

凱旋の兵等面に眞劍の氣持現はれ
寺詣でする

栃木縣 白石とみ子

光とも慕ひし姉は病を得われの悲
しみよそにして逝く

投稿規定

はがきに「四二首以内と
して一稿」と細部部或は係
あて住所氏名明記の上送
ること



先師を語る……………10……………

渡邊海旭先生

増 谷 文 雄

—
すべて人物
の規模の大き
な人物は、こ
れを一面から

觀察しただけでは、到底その人物の真相をつかむことは出来ません。傳記作者にとつて最も困難なのは、かゝる人物の真相を描き出すことです。またそれは何よりも骨折り申斐のある仕事だといふことが出来ませう。

明治の佛教會に輩出した人物の中でも、釋雲照律師のごとき、南

條文雄博士のごとき、清澤滿之先生のごときは、いはばその特筆すべき一面のみをもつて、その人物の眞骨頂を知ることが出来るのでありますが、前述の行誡上人のごときはさうでなかつた。上人は學の人でもあり、徳の人でもあり、識見の人でもあり、またこの上人をして政治家たらしめたならばと、政界の名士をして嘆ぜしめるほどの一面もあつたと聞いてをります。かゝる人物を、規模の大きな人物、巾のひろい人物と申すことが出来るならば、わが渡邊海旭先生もまた、至極その規模の大きかつた方、人間の巾のひろかつた方であつたといふことが出来るのであります。

先生は學者であつたが、決して單なる學者には止らなかつた。また先生は律師であつたが、決して單なる律師ではなかつた。また先

生はすぐれた教育者であつたが、決して單なる教育者だけではなかつた。先生はまた社會事業家でもあつたし、國士の一面もつよかつたし、晩年には淨土宗執綱をもつとめられたそれらのあらゆる面を綜合し、その綜合と關聯の中にあつて、人間理解の機微に參照するとき、はじめてこの先生の眞面目に接し得たりといふことが出来るであります。

二

渡邊先生の學問は、東京と獨逸とでその土臺がきづかれたものでありました。東京では淨土宗東京支校から、淨土宗學本校へとす

み、明治二十八年に優秀な成績でそこを卒業せられたのでした。そ



れより前、明治二十年、十六歳の時、淨土宗東京支校に入學せしめられたに就て、つぎのやうな因縁話がありました。

その頃、先生はまだ剃髮得度してまだ日も浅かつたのですが、一檀家の老婆のため、いそがしい寺務の寸暇をさいて、先生は、ひそかに地藏和讃の註釋をつくつてをられた。それはひろく内密にやつてゐたのであつたが、やつと完成したところを、ゆくりなくも師匠の海定和尚が発見しまして、讀んでみるとなかなか立派な出来である。これは一つ學問をさせて見ようといふのが、先生の東京支校入學の因縁であつたといふことであります。

淨土宗學本校といふのは、いまの大正大學の前身の宗教大學のまた前身でありましたが、明治廿八年にそこを卒業された先生は、いまの芝中學校の前身たる淨土宗第一敎校の敎師を拜命し、傍ら淨土敎報の主筆として、宗門の木鐸として活躍し、更に新佛敎同志會に参加して、佛敎界の第一線に立つてをられたが、明治三十三年五月、選ばれて宗命を拜し、獨逸に留學する

ことになつたのであります。

渡邊先生の獨逸滞在は十有二年に及んだのでありますが、その中、前半の約六年は全く研究室に籠つて、専心自己の研究に没頭されたが、後年の六年はしきりと對外的に進出活躍され、各大學や傳道學校の招聘に應じて、佛敎哲學、印度學等の講義に努められ、外人に對する東洋文化普及に貢獻するところが少なくなかつたやうであります。

前半六年の研究に於ては、主としてストラスブルグ大學のロイマン教授に師事し、まづ梵語、巴利語など佛敎原典研究に必要な基礎學を修め、それを基礎として、比較宗敎學の研究に歩を進められたやうです。

その間に於ける研究の成果は、隨時母國の研究雜誌にも發表されてゐたが、その中でも密敎發達論、孔雀王經、毘沙門天王經などの研究は、先生の深い學殖をうかがふに足る立派なものでありました。

なほ原典研究として、普賢行願讀の諸本を比較研究し、これに獨譯を附して刊行した論文があり、先生はこれによつて、明治四十年にドクトル・フイロゾフイーの學位を獲得されました。しかし、學位のこときものは、或ひは先生の眼中になかつたのではないかと思はれます。ある時、ロイマン教授が萩原雲來博士の言語學上の一勞作を示して、これに門下生一同の署名を求めたことがありました。その時渡邊先生は、

——吾人の天職量に是のごとき區々たる小事業ならんや。

と記して、浩然大笑せられたといふことであります。これをもつて「君が抱負の偉大なりしを伺ふに足る」とは、當の萩原雲來博士の遺憾であります。が、わたくしどももまた、これによつて先生の人物の規模の大をうかがふことが出来るやうに思ひます。

三

しかし渡邊先生は決して學問を蔑にした方ではなかつた。よく學問を重んじ、學問にいそしむ者を重んじ、御自身もまた生涯學問に忠實であられた。歸朝後の先生は各方面に非常な活動をなされたので、あれでは研究の時間はあるまいと思つてゐた人々もあつたが、そうではなかつた。渡邊先生の勉強の時間は主として朝の三時から七時ごろまででありました。だから、人々は、渡邊先生がいつ勉強されるかを知らなかつたが、先生は決して學を廢されはしなかつた。朝の三時からといふと極端な時間のやうに思はれますが、これも決してそうではない。三時起床といふことは、もともと佛敎律の定めるところでありまして、律僧はすべてこの起床時間を守るべきものであります。だから、律僧としての面目を堅持してをられた渡邊先生は、たとへ學問のためでなくとも、この時間を守られたに違ひあるまいと思はれます。

だが、先生の學問は、見せんがための學問や學位のための學問で

はなかつたと思はれます。獨逸では學位を得られたが、日本の學位を得べき學殖の人でありながら得られなかつた。また著書としても



『歐米の佛教』一巻があるだけで、その『歐米の佛教』も、友人高島米峰氏の經營する丙午出版社の刊行でありますから、多分米峰氏につゝかれ、促されて書いたものであらうかと想像されます。しかもこの唯一の著書は、その分野に設ける唯一の權威ある書として、今日なほこれに代るべきものを見ることが出来ません。

先生の住職寺院は、前にも述べたやうに、深川の西光寺で、この寺は關東大震災に際して罹災しました。その際には、先生の尙大な著書も、貴重な研究も、すべて烏有に歸して失ひました。このことは先生にとつて大變な痛恨事であつたと思はれます。その時の話にはく

江 東 災 大 燬 無 遺
幾 萬 喪 妻 亦 哭 兒
止 說 寒 僧 亡 此 苦
燒 書 卷 々 若 妻 兒

大正十二年九月震後

壹 月 海 旭

幾萬幾十萬の人々が妻を失ひ、兒を亡くして哭いてをる。だが律僧海旭には失ふべき妻もなく子もない。先生には妻子を失ふといふ苦しみがなくてよかつたといふ者があらば、説ふを止めよ。生涯をかけて研究し來つた研究、生涯の尙友として親んで來た萬卷の書を焼いた悲しみは、決してそれに劣るものではないと言ふのでありま

す。焼書卷々若妻見、焼け失せた一卷一卷に手向けるこの一句は、當に學僧海旭和尚の面目を語るものであると思ひます。

四

渡邊先生が學僧としての最も大きな功績は何といつても大正新修大藏經の刊行であつたと申さねばなりません。先生は多くの著書は遺されなかつた。貴重な研究も震災に焼けて埋もれたところが多かつた。しかも、この大正藏經の刊行によつて寄與された先生の學界への貢獻は、大正・昭和の佛教學界における最大なるものの一つであつたのであります。

この刊行事業は大正十一年五月に始められて、大正十三年四月八日をもつてその第一卷を刊行し、昭和七年五月にいたつて、正・續八十五卷を完了しました。その後、更に圖像等二十五卷を加へて全百卷となつたのは、渡邊先生没後のことであります。

この刊行に就ては、高楠博士と渡邊先生とが、その都監として一切を統括し、その校合編輯に就ては、渡邊先生は主として増上寺における元・明・高麗の三大藏の校合を監修され、高楠博士は聖護藏、宮内省圖書寮等における校合を監修せられました。

この大正藏經が、佛教學界において占める地位、また現に佛教學界を裨益しつゝあること等については、いま改めて述べるまでもないと思ひますが、その學的功績はひろく認められて、事業完成の翌

昭和八年一月には、朝日新聞はこの事業に對して朝日賞を送りました。その時渡邊先生はすでに最後の病床にあつたので、高楠博士は、この事業を代表して賞を受けられ、且つ朝日講堂において、この事業に關する學的講演をなされたのでありますが、あたかもその講演中に、渡邊先生危篤なりとの報を受け、博士が西光寺にかけつけた時には、先生はすでに意識不明の状態にあり、その日の榮譽を告げる術もなかつたのであります。だが、先生のまことの榮譽は、この大正藏經とともに、ながくこの世に遺り輝くことと信ぜられます。

五

學僧であり、律師であり、また偉大なる教育者であつた渡邊先生が、それらの諸面とともに、更にゆたかなる國土の面影を有せられたことは、先生の人物のスケールを一段と雄大ならしめ、且つその人物の大きな魅力を形成してゐたかに思はれます。

渡邊先生の住職寺院であつた西光寺は、もと深川區の御船藏前といふところにあつたのですが、ここは元來、道一つをへだてて三方とも本所區になつてゐましたので、震災後の大東京市の行政区劃整理に際して、この御船藏前町を深川區から本所區に移管してはどうかとの議が出たことがありましたが、それに對しては深川區選出の市會議員から猛烈な反對があつて、その當時にはつひに實現を見る

ことが出来なかつたのですが、その反對の理由といふのが、實に愉快な話であつて、

「御船藏前が本所區に移管されたんでは、西光寺の渡邊先生が深川區の人でなくなるから、それは困る。」

といふことでありました。かうした渡邊先生の人氣といふか、人間の魅力といふか、それは勿論渡邊先生の學と徳ともよることでありませうが、また先生獨得の狹骨や國土の風格によるところが大であつたことを否定することが出来ません。

ある人が渡邊先生を評して、渡邊先生の風格は近代佛教界まれに見るところであつて、僧服をまとふては佛教界の大導師であり、僧服を脱しては純乎として純なる江戸つ子の代表であり、また愛國の至情もゆるがごとく典型的志士であつたと言つてゐたことがありますが、當にその通りでありました。

わたくしは兩三度、先生の机の上に雑誌「國本」を発見して、拜借して讀ませていただいたことを覚えてゐるが、その頃先生は確かに平沼さん達の國本社（こくほん）のメンバーであられたのだと思つてをります。また國土館の館長に擔がれたり、頭山滿翁（とうざん）など國土型の人物との交遊が多かつたことも、この先生には當然のことであつたと言ふことが出来ると思ひます。

また、だい以前のことであるが、こんなこともありました。

東京の外國語學校で印度語を講じてゐたアタールといふ印度人

は、かつて印度の獨立のために奔走した志士でありましたが、そうした過去の關係から、彼の身邊にいろいろと魔手が伸びて、彼はつひに毒を仰いで死んでしまつた。ところが、彼の周囲の人々は、イギリス大使館等への氣兼ねから、屍を前にして、茫然手をつかねてゐる許りでありました。そこに、渡邊先生が飛びこんで來ました。そして先づ葬儀の費用を調達し、自ら導師となつて盛大に葬儀を営み、さらに一人の門下生をして、アタールの遺骨を故國の遺族にとどけようとなりました。それをみて、先生の知友は忠告して言つた。

「葬儀をしてやるのはいいとしても、それ以上に立入るのはどうであらうか。國際問題もあることだから。」

しかし渡邊先生は毅然として答へて申しました。

「佛徒は正義人道の大使である。正義人道のためには、佛僧たるものは、常々その生命をかけてゐるべきだ。僕はすでに充分覺悟をしてやつてゐるのだ。」

そして、決然として門下生をして遺骨を奉じて印度に渡させたのでした。

いまや時世は、俄仕立ての愛國僧や、附焼爰の國士を氾濫せしめてをりますが、彼等には到底この先生の眞似は及びもつかぬところであらうと思ふのであります。

(齋藤清畫)



婦人衣類の切符制

生田花世

昭和十七年二月二十日、臺灣、朝鮮をのぞく全日本の繊維製品配給消費統制規則が發布されて、二月一日限り、衣類は點數切符制となつた。

新聞は規則をかゝげ、次のやうに説明してくれた。

政府はかねて繊維製品の配給消費に關する綜合切符制の採用につき研究中のところ、今回いよく詳細なる統制規則を制定、二月一日より本式にこれを實施するることとなつた。

戦時下における生活必需品を專ら國策の要求する方向に統制すべきものたるはいふを俟たぬところであり、わが國においてもすでに昭和十四年末頃から品種別切符制を採用して來たのであるが、特に衣料の殆ど全部を占むる繊維製品の取扱に關しては、もつとも慎重なる考慮が費やされた結果、まづ昨年十一月の繊維製品配給機構整備に關する商工省の通牒となり、さらにいま重ねて總動員法の物資統制令に基く繊維製品配給消費統制規則の施行を見たわけで

ある。すなはち繊維製品の製造配給については、すでに昨秋の通牒により、整理が進められ、殆ど新機構の完備を見つゝあつたところに、大東亞戦争の勃發した結果、絹及びスフを除く繊維製品の原料は全然海外より輸入されなくなり、いよく速かにその配給消費を全面的に統制する必要を生じて、今次の綜合切符制急施となつたものと思はれる。

私は夫も子供もなく、こゝ十年間こし家庭といふものを持たず、着物なども、昔買ったものを、次々に工夫して着てゐるといふ次第で、極めて簡單生活なので、一見、突然に感じられる衣類の點數配給發表も、『アア、さうなつたか！』といふ位であつた。

が、世の多くの女の人は、私のやうに簡單にはゆくまい。きつと、こゝでも、かしこでも、憂色をたゞへて、この事を語り合つてゐるに違ひないなどと思つた。

ところが一月二十一日、ある婦人の會合へ行つて、多くの主婦方からきいたのは、私の思つてゐたことが杞憂であつた事だ。

この婦人の會には、いふまでもなく、軍需景氣で、急に収入がふえ、ガラガラつもる金を今こそ多年辛抱の花を咲かし、ほしいとおもつてゐたもの、みんな買つてやらうと、デパートや、呉服店にかけつけるやうな人々とは別の階級の主婦たちであつた。

どの人もおちついてゐた。

『いかがですか、今度の衣服切符制は？』と問ふと

『ハア、まあ、どうにか成り立ちませう』と一夫人は云つた。

『何しろ、これまでに持つてゐるものが大分ありますから、それを次々直してゆけば、本年の切符で、來年の準備も出來さうです。たくは、五人家内ですから、五百點あります。五百點あれば、どうにでもなります。たゞ、かうした事となつて、氣のつくのは、いつ、いかなるものを買ふかといふ、物と、時期と

の判断——これに頭がいりますね』

『頭！ 頭！』

ともう一人の夫人も云つた。

『下手すると、年のはじめ頃に、大方つかつて了つて、下半期に、ビリビリするでせう。そんな事のないやうに、大分、考へなくちゃなりません』

みんなは、點數が不足だといふ事よりも、この使用法について考へこむ模様であつた。

○

主婦のかうした心の傾向を敏くもくみとつた方々に、扱ひ方の意見が出はじめた。次に引用するのは東京女高師教授成田順子女史の一案である。

ドイツでは切符制になる前から洋服を着たら最も經濟的かと研究してゐた。日本では今洋服と和服の二重生活をするほど衣類があり過ぎたので、家庭の主婦は一向に衣類について科學的研究をしてゐなかつたが、今後は衣服の壽命を長くするため、洋服はブラシと銀で絶えず手入れをす

る、また汚れをいつまで放つておくとそこから衣服がいたむから汚染はすぐとる。あるひは洗濯はあまり探まずに掴み洗ひをする、といった注意を怠つてはならない。また、鼻緒の切れて芯の出てる下駄や踵の曲つた靴を履けば、スフの足袋や靴下でなくとも二時間ぐらゐですぐ破れてしまふ、スフの足袋や靴下は買つて直ぐに刺しておくとよほど保ちが違ふ。婦人の靴下の長いのは無駄で、婦人標準服も脛までの長さにスカートを決められてゐる。婦人標準服は今まで二丈九尺か三丈も要した布地が二丈四尺で出来ることになつてゐるが、婦人の衣服が並幅で一人五尺違つても全國婦人では大變な節約になる。洋服も同じことであるが、上に着る洋服や着物は一着でも下に着るコンビネーション、スリッパ、ズボース、肌縮絆、腰巻等はどうしても二、三枚から三、四枚は保温、衛生の上から必要で、一年に百點あるなら五十點は直接肌につける下履き下着にして、あとの五十點で

洋服や着物を作るやうにではなくてはならぬ。

私はこの成田女史の説に同感し、又、その案に教へられた。

何しろ、今日は、女性も男性に、着物を着飾つて見せる時代ではなく、魂を見せる時代となつたのである。日常然り、外出の時、又そうである。花嫁も亦、着物々と押し切つて云ふべきではないのである。

明治以降、五六十年にもわたつて、先賢者が、口をすくして、簡易生活を唱導しつづけたのも、かういふ時が来るからといふ事で豫言してくれてゐたものと考へていい。

今こそ日本婦人は、衣は、必要なだけといふ的確な動きに、身を處するのである。云つて見れば、國家の慶事である。

○ 『吐き出せ、吐き出せ、箆笥の中から!』

こんなに云ひたい。

日本婦人が、何もかもお國のためと、貯めてるものを吐き出したなら、こゝ四五年、五

六年、純綿ものが、溢れるであらう。そんなに澤山貯へられてゐると見なしてよい。

たゞ一寸つけ加へたい事は、十人の中に、

二三人位は、着るだけしか持つて來なかつた人々もある。ほんとに無く、又、これまでに貧しくて買へなかつた人が、萬一、ひどく、困り、ボロボロに破れてゐるのは、ツギするとしても程度問題で、あまりにひどいのや、不潔になつたのは用ひないがいいし、さうした人々はほんとに困りぬくとき、隣組の組長に訴へていい處置をいたゞくといひ。

そんな氣の毒な人々を見てしらぬ顔をする隣組長があつたら不埒であると思ふ。どうもしてぐれなかつたら警察の生活相談所へ申し出るとよからう。

今や、日本人は、ともに耐へ、ともに凌いでゆくのである。一人も勝手してはいけないし、一人も、極端につらくてもいけない。

共存共榮は遠方の事ではない。かく、萬事切符制となつた今日こそ、皇民として、共救共生する。それが共存共榮である。

町を歩いたり、停車場に行つたりして、東京人を見ると、みんな善良で、どこにも、惡人らしい人、身勝手らしい人の一人も見當らない。それなのに、きくところによると、一月二十日の衣服の切符制發表、同時に、デパート、呉服店の二月一日までの休業を、どこからかぎつたか、ワシサと、デパート、呉服店におしかけて(女が多い、女の中の主婦が多い)靴下三十足とか、ワイシャツ五十枚とか、反物五十反とか買つたものがあるさうな。呆れてものがいへない。

一人といへども、わるい女身勝手な女はこの東京人の中にあらずに見えないのに、新聞で、かうした事を知らされると、何とも知られず暗鬱である。つひに經濟警察の出勤を見、買ひ溜め品はさしおさへられ、調べののち、點數にして買ひとらしめたといふ。ああ、こんな事がなかつたら、いい銃後だか……

百點の切符を、大抵の人が、大切に持つて、年の終り頃へとくりのべるであらう。年末の

買ひもののぶりにそむくものである。

配給は、女性の頭を敏活にするし、經濟的にするし、世の中の空氣を、根こそぎかへて了つた観がある。

女流作家などの小説は、二三年前の作品など、この頃、單行本に出来ないところばしてゐる。切符以來、女の人々のあらゆることが、變化してゐるからである。會話もちがつて來てゐるし、着物のこのみもちがつて來てゐるし、工夫も、なか／＼深刻である。

丸ノ内あたりの女事務員はもう勤め先で、白足袋をいつもはくといふ事を考へてやめるやうだ。すてずにおいてあつた靴下をかゝつたり、先を切つて、まるめたりしたのを、下にはきこんでいたり、持つていつたりして、それをつかひ、白足袋は、たゞ通行の時だけとするやうである。

私は、女の人にあふ毎に配給についての即應狀態をきく事としてゐる。まだ日數が少いので、さして名案ふりもあつまつてゐないが、今年の年末とか、來年のはじめとかには

方々の隣組や、婦人の集りで、實地即應の經驗談交換など行ふがよいと思ふのである。

思ひがけない人が、器用な事をしてゐるものである。大小によらず、一つでも二つでも、器用な事をしてゐる人があつたら、その方法は惜しみなく公開してほしい。合理的にゆきさへすれば、一寸不幸に見えた事でも、幸福への端緒とする事が出来るからだ。

文化ニュースで見た事だが、岩手縣、東海岸の末崎村は、昭和八年大海嘯にて、さんさんの目にあひ、もともと貧寒であつたのが、たゞきつけられて、飢饉線にまで降つた。

然し、末崎村の人々は自棄しなかつた。其後七八年の間に、一同協力して復興をはかり、孜々として努めたから、今日は、一軒一月百二十圓内外の収入が漁からあるやうになつてゐるとの事だ。

大東亞戰は、明かに東洋を試み

るところの神様の試練であり、佛様の化轉の妙法であらう。

現世淨土は、靈の切符制から始まる。『ありがたい、もつたない』と感謝して、戦争の破壊を免れてゐる事にくらべて見て、『まだ！まだ！』といへる幸福を考へさせられるのである。

黒谷法主望月信享
大僧正名號付

佐藤玄隆編

和譯佛父母恩重經

日常勤行
食作法 付 肉筆石版刷
過去帳 折經本美本

一般追善供養印施用に好適！

見本一部金五十錢（送料共）

十部以上御購入には割引します。

鹿兒島市易居町三二

發行所 不斷光院

振替鹿兒島四八八四番



雪の日抄

吉田 絃二郎

近ごろめづらしい大雪である。朝からひつきりなしに粉雪は降りつけてゐる。けふは佛の命日である。朝早く訪ねて見えた友人が美しい花を持って来てくれたので、さつそく佛に供へることにした。今日は町まで花を購めに行かなければならぬと思つてゐたが、これで雪の中を出かける必要もなくなつた。考へて見るとこの六年の間、暖いをりも、寒いをりも、ともかく一日も佛前の花を缺かすこともなくやつて来た底には、いろいろの人たちの心づかひがあり、しかもまるで偶然のやうに花の心配をしてゐると誰か美しい花を持つて見える。ありがたいことである。

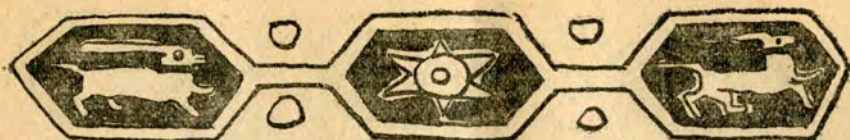
そして雨や雪で人も見えないをりでも庭をさがし

て見れば何かの花が咲いてゐたりする。

今朝はまた隣り村に住んでゐる人から炭を取りに来るやうにとのことだつたので、朝早くまだ雪の降り初めぬ前に使をやつて炭二俵をいたぐことにした。使の者が炭を運んで来たころから雪が降り出した。當分は雪が降つても氣丈夫である。しみじみと人のなさけのありがたさが身にしみる。

この數年たゞ一切れの炭も大切にするやうになつたのも時勢のおかげである。茶碗の縁に附いた一粒の米もいたゞいて喰べるやうになり、一片の澤庵も粗末にはしなくなつたことを思ふと、これもありがたいことである。

年の暮れのことであつた。今年は配給の熨斗餅だ



けで春を迎へるつもりであつたが、その間に召し使ひの者が何處かで數の子を探し出して來たので、餅と數の子だけで春を迎へることに決めてゐた。「足らはぬは足るですますぞ庵の春」で、不自由がちの庵の生活も、わたくしのやうな無性者にはかつて氣易い。

しかし大晦日の午後になつて二人の來客があり、その二人ともが春の馳走を抱へての珍客であつた。羊羹、餅、海老、餅、煎餅、カリフラワー、トマト、伊勢の蒲鉾、きんとん、鹽元豆、落の羹、福茶、その他二抱へのみやげをいたゞき孤獨の生活も富限者の春を迎へることになつた。人の心のありがたさを返して年を送り、年を迎へたわけである。

物の生活が不自由になればなるほど、心の生活はゆたかになつて來る。やがて誰れも彼れもが谷川の一掬の水をも押したいゞいて飲むやうな心懸けを見出すことであらう。

x

去年の夏の嵐で庭の櫻木が倒れ、隣り境の櫻が繁

つて來たので、櫻を伐り、櫻の枝を卸したら百把ほどの薪ができた。東京の友人たちが燃料に困つてゐることを知つたので分けてあげることにしたが、ひゞくよろこばれた。與へる者も與へられる者もありがた涙を流さんばかりである。

わたくしたちは今までも薪を持つてゐた。しかしその薪にこれほど人間の美しいなさけや、尊い涙がこもつてゐるものとは想像もしなかつた。今は一粒の馬鈴薯にも、一顆の林檎にも、一碗の珈琲にも人間の美しいなさけと感謝の涙を味ひ得るやうになつた。わたくしたちの心の世界が押しひろめられたのだ。ありがたいことである。

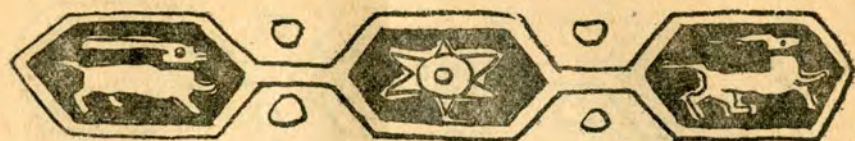
x

風が吹く。

今までは時として風を数じたものである。

今はさうではない。すこし強い風の吹いた翌朝は庭に下りて薪を拾ふのも一つのたのしみとなつた。

貯へて置いた薪を友人に分けてしまつたが、風が吹くごとに要るだけの薪は庭や裏の木立の中に落ち



てくれる。今までは捨てゝしまつた枯枝であるが、風呂を沸かすだけの燃料には事缺かぬ。

今までは秋ごとに刈り取つて焼き捨てた芒も今年は枯れたまゝに残して置いた。そして必要なだけ鎌を入れては藁の代りや苗床の風よけに使ふやうにしてゐる。

何も持たない孤獨者の春は人の美しい心によつて富限者の春となつた。

薪も、藁も無くなつたこの冬は家の周囲の木立や裏の畑の枯れ芒によつて快い温かさを恵まれてゐる。

生きてゐる間は、かならず人は天により、自然によりて恵まれる。

いろいろなことを考へて不圖眠れなくなるやうな眞夜中もあるが、わたくしはそのやうなをり一切を自然に委せるといふ一念に生きることの尊さを、わたくし自身の心に言ひ聞かせる。

家の周囲に大きな木が繁つてゐるので板庇を打つ梢に夜半の夢を破られて、それからはなか／＼眠れないで困ることもあつたが、このころではその梢の

一本一本がわたくしに恵まれる自然のおくりものだと思ふやうに自分の心を馴らさうとつゝめてゐる。

×

命を賭ての生活ほど尊いものはない。わたくしたちが安穩に暮らしていろいろな理窟を並べてゐる間も、空にはこの國土を守る勇士たちが寒風を切つて飛行してゐる。あの勇士たちには理窟といふものはない。一刹那一刹那が眞理そのものであり、悟道であり、涅槃である。二十年三十年の安居瞑想の生活に見出し得ない底の悟道を、あの人たちは生死の境に於いて把握しつゝある。

朝ごとに讀む新聞紙上に見る戦地報告の裡にわたくしたちは幾度最高の人間の姿を見出すことであらう。吾人間の姿ばかりではない。勇士たちの周囲の物質までが、勇士たちの手によつて精神化されてゐるのを見る。マレイ戦線の一勇士は自分の傷口からほとばしる血汐を砲弾になすり付けて「砲弾よ、心あらば俺の血を受けて敵陣に命中してくれ」と言つて、砲弾を装填して見事敵陣を破つた。布哇の海戦



に、マレイ沖の海戦に航空隊の勇士たちはその一つ一つの爆弾を拜んで敵艦上に落した。

こゝでは人間と砲弾とはたゞ一つの魂となつて生きてゐる。勇士たちの旺盛な精神力は砲弾をも爆弾をも精神化してしまふ。

マレイ沖の海戦に英吉利の主力艦を撃沈したわが航空機には「汝の愛機を劬れ」と書かれてあつた。

ラングーン進攻中の部隊は幾千丈の峻峻に沿うて進んで行つた。たまたま谷底に落ちた愛馬は救ふすべとでもなかつた。愛馬は谷底にあつて救ひをもとめて主人を呼んだ。やがては虎の餌食となるであらうことを想像すればたゞ腸を斷つのみであつた。

勇士たちは泣きながら愛馬と別れて行軍を急いだ。

戦線では航空機も愛馬も人間化されてゐる。一切の物が人間の魂に溶け入り、人間の慈悲心の裡にあたゝかにつゝまれてしまふ。

戦争は一面に於いて敵を殺す。しかしその一面に於いてわが勇士たちは佛陀の慈悲心を權化しつゝ、人間の心の深さ、人間の愛の強さを如實に示現してくる。

中央教化團體聯合會編纂
生田花世著

輝く人柱

B6版四三六頁
價二圓二十錢

教化史蹟物語

發行所

東京市京橋區西八丁堀三ノ八新踏社
振替東京八八七九番

一瀬直行著

小説集 怒りの町

B6版三百頁
價一圓八十錢

發行所

櫻木書房

下谷區上野櫻木町二

小橋麟瑞編

浄土宗綜合勤行式

折本(腰五寸)九〇頁 價三十錢
千三錢

發行所

報恩社

東京市本郷區駒込林町一六三番地
振替東京一六六九三一番

淨土隣組座談會

理窟より先づ實行

座長 さあこれで御相談のことが終りましたから、これから隣組座談會に移りませう。ところで今日の集りには遅刻が一人もなく結構でした。

甲雄 この前には時計が遅れてゐたのを知らずに大失敗、遅刻して大變叱られました。そのかはり今日は僕が一番早かつた。

乙郎 云ひ譯は駄目々々、これが常會だからいけれど、空襲で爆彈が落ちた時なら叱られる位ではとても済みませんよ。

甲雄 いやもう降参、謝ります。

それに今日の相談で、空襲に際して一人々々の馳けつける道順まで決めたのだからもう大丈夫です。

座長 決めたからには一度集合の演習をしませう。ほんとにこれからは理窟や相談ばかりでなく、實行第一主義でがんばりませう。

乙郎 何がなんでもやり抜くぞ。

甲雄 戦ひ抜かうこの一戦！

丙子 主人のお友達で、「誰れでも出来る貯金の方法」だとか、「面白い程お金の儲かる秘訣」とか云ふ原稿ばかり書いてゐる方がありませんけど、御自分では少しも儲けな

しておいでですわ。(笑聲)

結婚は忠義です

戊枝 奥さんお目出度はいつでしたね。近頃買物にはお困りでせう。

丙子 え、一時はお胎の子にきわ

ると思つて心配しましたが、今度町會の方で結婚優先切符を出して

頂いて、とても助りました。

戊枝 それが當り前ですよ。冷えて流産でもしたらそれこそね。

丁造 わしなら優先切符がなくても先きに買はしてあげる。

甲雄 お爺さんはなかなか思ひやりがありますね。

の賣ちや、お國からあづかつてゐるも同じことですぞ。

甲雄 なるほど、たしかに人的資源は總ての土臺ですからね。

座長 結婚は忠義です、とある縣で結婚獎勵の運動をしてゐます。

國家興隆の基礎は結婚にありと云ふので、男子は二十五歳、女子は

二十歳までに全部結婚するやう指導するさうです。何うも晩婚の傾向が仲々直らぬやうですね。

丁造 今の若いものが夫婦ともども苦勞して健全な家庭を建設しよう

と云ふ努力がないから悪い。月給が少なくて嫁をもらへないと

か、また女子にしてからがあまり過ぎる。結婚すればそれで楽しいこ

とばかりだと思つてをるらしい。

甲雄 全くです。うちの女房に聞かせてやりたい。

座長 それに合性だとか年廻り、

が位の吉凶等といふ迷信が大いに害をなしてゐるやうですね。

丁造 いや／＼それは大抵仲人の口實で、皆がやかましく云ふ程に今の若いものは問題にしろとらんですよ。わしに云はせれば若いものが

結婚を自分の楽しみにしようと云ふ性根が氣にくわん。わし等の時分には銅釜さげてと云ふのが合言葉ぢやつた。

乙郎 もうよく判りました。

丙子 大部若いものが攻撃されましたね。お婆さん毎日のお守りでする分お疲れでせう。

戊枝 いえ何ね、坊やが少し重くなつてお守りが辛くなる時分には嫁がまた輕いのを産んでくれますので、いつも輕くて骨が折れませんですよ。(笑聲)

敵機より恐い謀略

甲雄 お爺さんのところのは今とちらずです。

丁造 作は今度南洋の方らしいよ。あちらは暮いがよい所ぢやさうだテ。その内にわしを呼んで呉れるでせう。

乙郎 仲々いゝ元氣だね。

丁造 これが老後の務めぢやよ。大いに張り切らんにや。今にボルネオの天氣豫報を毎晩聞くやうにならうと云ふものさ。

丙子 シンガポールでは荒鷲たちの猛爆で眠ることすら出来ないとか、皆神經衰弱になつてゐるさうですが、氣持ちをしつかり持つてゐることが大切ですわね。

丁造 準備裁端整へて待つてゐるのに敵機は一つも來よらん。しかし世界中で空襲のないのはわが國ぐらゐのもので、全く有難いことですぞ。だからと申して油斷は禁

物、この緊張を最後まで忘れず、長期のふんばりが大切ですよ。

甲雄 最初の意氣込み最後まで！

乙郎 決して冷めない火の玉だ。

座長 しかし敵機より恐しいのは敵の謀略です。ありもしないことを云ひふらしたり、敵のデマ宣傳に氣をひかれたりする者があればそれは敵の廻し者でせう

甲雄 守る一言手近な國防ですナ

大東亞戰爭の意義

戊枝 先日總理大臣の演説に、日本と支那とは兄弟だと申されたさうですが、蔣介石も弟なのでせうかね。

丁造 首相の言葉に、抗戰支那は今日に於てもなほわが國と兄弟だと思ふと云ふのがあつた。つまり米英依存の重慶に對しては無茶を云ふ子供を折檻するのと同じであ

つて、兄たるべき道に立つて覺醒するやういたしてをると云ふのぢや。

乙郎 重慶政府の反省するものさして遠くはありますまい。他を導くには根氣が必要でせう。

座長 大東亞戰爭は「人類史上に一新紀元を劃すべき新たな構想」と申すのだと、矢張り首相が云つてゐます。つまり東亞の天地を米英の擡取から解放するのがわれわれの使命である。だから東亞の各國各民族は大東亞共榮圈の建設のために擧げて参加せよと云ふのです。

丁造 實に崇高な大使命にわれながら頭がさがる思ひぢや、東亞の諸民族が手を擧げて喜ぶ姿が目に見えるやうぢやな。

警澤は敵です

甲雄 ハワイの大空襲の際には米國の方が先きに發砲してゐたのださうですね。

座長 さう、米國査問委員會の報告の中に、皇軍が真珠灣を攻撃開始する前に米國の方でわが潜水艦を攻撃したと發表してゐます。

丁造 それでは米國の軍隊の士氣がもつともつと弛緩してゐたのだぞと云つてゐるやうなものだね。

丙子 妙な所で威張りますのね。

戊枝 米國の軍隊はとても贅澤三昧してゐるさうぢやありませんか。

そのくせ弱いのですね。

甲雄 贅澤は敵だからですよ。

座長 いや贅澤な國民ほど戦争には弱いものです。前の歐洲大戰の時に獨逸で餓死したのは申流以上に多かつたと云ひます。

甲雄 その點僕は絶對安心、

丙子 ほんとですか……

甲雄 贅澤したくも出来ないところが大丈夫。

貯金は一舉兩得

座長 たとへ物が買へても不用不急のものは全部取止めにしなくてはいけません。明年度の所要資金は二百二十億圓に達してゐます。従つてこれだけではどうしてもわれわれ國民が貯蓄しなくてはならないと云ふ責任額です。

丙子 十圓札で何の位ありませう。

座長 列車の貨車で十三輛位。

乙郎 ウリ、とても懐へは入らん。

座長 それに貯蓄をすれば餘分なものを買はなくなるし、従つて物と金との調整がとれ、わが國の經濟力はますます餘裕綽々と云ふことになつて、帝國の前途は洋々と

開けるわけです。

丙子 貯金をしてお國のためになら、こんなしやすい御奉公は

ありませんわ。

甲雄 皇國の興廢この一錢にあり

各員一層奮勵貯蓄せよ……だ。

乙郎 貯金は身のため國のため。

丁造 わしの目からみても今まではいらぬ見栄が多すぎたな。自分のお金だからといつて、どんどんな駄遣ひするものは、それ敵の廻し者第五列ぢやよ。何うも近頃はもの冥利を知らん奴が多くて腹が立つてならんわい。

戊枝 お爺さんはすぐお小言ですな。

座長 とにかく一度贅澤をやるものとにもどすのが難しいものです。だからいつも生活は切詰めるだけ切詰めて、それで餘つたお金は貯蓄するなり、國債買ふなりし

なくてはなりません。

戦ひながら肥える

甲雄 シンガポールが陥落したらもうよいのかと思つたら、これは前衛の戦間に過ぎなくて、決戦はこれからなのださうですね。

乙郎 シンガポールが落ちてからは、われわれ一層元氣を出して長期戦を覚悟してあくまで敵の最後の止めを刺さなくては……

甲雄 近代戦は戦ひながら肥えてゆくのださうだが、これは何う云ふ意味なでせう。

座長 戦争が單なる消耗戦なのは昔のこと、今の戦争は戦ひながら復興もやる、また肥えてもゆくそしてますます大きく戦つて行つて有終の美を収めるのださうです。

乙郎 それでこそ幾年でもがんばれるのですな。(文責、村瀬秀雄)

俳壇

太田
耳動子選

島根縣 石見 千早
ますらをの動にかけて御代の春
評 兵隊さんの有無味をつくつく感じさせられる

岩國市 長岡 白朝
神農の顔をならべて焚火談
評 農夫といふ神農としたのが苦心の表現であり其の爲めに如何にも細々しい顔をした農夫達を想像せしめられる

奈良縣 寺田 宣信
吾子二人健やかにして年暮る
評 最も平凡ではあるが最も満足してゐる様子が窺はれる

京都市 竹内 はじめ
鏡餅うつりし影のまどかはる
秋田縣 鈴木 白舟
冬陽射し防空壕の戸開けてある

和歌山 北垣 木瓜
ひととせの短き除夜の鐘にきく
寒蘭や眼鏡のくもりコーヒより
東京府 船津 定祐

富山縣 佐伯 光安
御降や社の庭に滑りけり
群馬縣 高橋 務

山里や破れ障子につるし柿
愛媛縣 喜安 明

落葉ふむ音と風まじはれる
京都市 福島孝治郎

月を得て奈良辰今宵籠なる
東京市 井原し ま子

大神をまつり元旦よき日かな
京都市 駒 敏郎

鐵路近く列車走れる焚火かな
五日市 山口 勇治

除夜の鐘鳴々として絶ゆるなし
大分縣 河野 子葉

戦勝の日本に生れ初詣
茨城縣 眞木謙太郎

冬麗南天の實のつぶらかに
栃木縣 大輪 清

冬の風枯木の梢ふきならし
大田市 森 正義

河の面只くろづみて冬に入る
朝鮮 三浦 砂千子

戦ひの話に寒さ更けてゆく
今治市 三木 光子

どの家も柿干し並べよき日和
京都市 永田 七郎

何事も申すことなし國の春

島根縣 林 良碩
冬晴の廻廊の縁つめたけり
東京市 藤原通孝

富士晴ていよ霜解けきびしけれ
東京市 渡邊 貢

軍歌響く冬陽があたる居間にゐて
東京市 渡邊 一念

南天の紅きが雪を散れる
名古屋 堀 典雄

この寺の歴史を秘めて松の秋
東京市 清水金鈴子

曙闇に初漣送る焚火かな
奈良縣 水谷 良子

神垣をはるかに拜む月の華
京都市 松木 哲洲

黄骨の景色寒さや京の街
島根縣 神 一倫道

霧に浮きて繪をそのまゝの松江城
小樽市 平井 正念

初鶏にまづ燈明を供げにけり
滋賀縣 重野 ふみ子

裏通る汽車のひびきも師走かな
北海道 花田 順往

鳳 飛行機 鳳も風の春
宮城縣 堀川 秀秋

戦捷の春を迎へていふことなし
大阪府 吉村 秋種

家毎に空の備へや羽根突ける
香川県 日向 清月

思ふこと浮はぬほどに炭をつぐ
島根縣 山根 恒夫

一とところ日の洩れ來たる暁かな

京都市 黒野 智善
十五夜の月は流れて友を照らす
京都市 拜郷 賢三

ふとんから猫鳴き出たり雪の朝
東京市 藤原通孝

落葉して貧しき山に墓ありぬ
北海道 長谷川 初男

笹折れや我が退院の日も近し
山口縣 山本 定元

丙種とて召さるる身よな雪に鍊る
三重縣 加藤 陶月

くれなゐの落ち椿より入日かな
名古屋 堀 典雄

かりそめの風邪にばつくり近れけり
北海道 前野 賢一

懐しや旅にきよたる除夜の鐘
山形縣 西澤 正一

攻防の氣分牙えたり寒暄古
大田市 中野 悦子

立春を遠く放しぬ吾子淳子
福岡縣 西山 博

炭拾ふ子等勵ましてわび住居
大田市 吉村 秋種

音もなく流れをりぬ冬の川
島根縣 仁阿 蘭

連れる峰の雲より初日影
大田市 森 正義

初春の刑務所人の影も無し

投稿規定

官製はがき一四二句以内
と淨土宗氏名明記の上
てに送ること

の島半來馬

教宗と族民



隆康村中

(ジヤングルの樂人——ペラク州のサカイ族)

熱帯密林の地馬來半島(マラツカ半島)も干戈一度動いて忽ち皇軍の席捲するところとなり、今や全圖を擧げて東亞復興の基地たらんとしつつある。ハリマウ(虎)が吼えプア

ヤ(鰐)がのたちちウラル(蛇)が匍ふウタシ(密林)の國、季節風とスコールの吹荒ぶ土侯と鞭族の住まふ處、灼熱の太陽(マタ・ハリ)と夢見る月(ブラン)の照らす地域に

鐵旗はいま熾と輝いて新たな生命が芽生えつつある。このゴムと錫との半島には、そもどのやうな人が住み、如何なる宗教を奉じ、どんな習俗を行ひつつあるのか？

英領マライの全領域は我が臺灣の四倍に近く、昭和十五年末現在で總人口五百五十萬四千人に上つて居る。人種的構成を見ると、約二分が歐洲人・歐亞混血人・其他で、主要分子は支那人四割二分八厘、マライ人四割一分五厘、印度人一割三分六厘の三者である。半島の支那人が地元のマライ人を凌駕して最大人種となつたのはこれより二年前以來のことだが、既に二十年も前から少くも聯邦諸州ではマライ人と殆ど同數に達してゐたのである。此等の華僑は主に廣東福建兩省の南部沿海地方(廣東、潮州、廈門等)や海南島から來住したもので、その經濟的勢力は最も根強いものがある。印度人は北からも南からも渡來して居り、南印のタミル語・テルグ語・マラヤラム語等を操るドラヴィダ諸族(ヒンズー教徒)や北印ラホール近邊のシク教徒やア

アガン境邊のトルコイラニア系のバザン族(同教徒)などが數的に多い。其他の外來者としては、實權を握つてゐた歐洲人の外には錫蘭・緬甸・泰などの佛教徒もあれば、我が同胞の進出も交へ、またマライ群島の來航者も見出されるのである。

元來の人類的主調をなすマライ人は、廣くマライ群島に擴がつてゐる比律賓人モロ人テラナテ人ミナハサ人アムボン人爪哇人ブギ人等を含む所謂インドネシア人とかマライシア人とか呼ばれる原住民族の同族で我が臺灣の蕃族や遠く離れたマダガスカル島のホバ族も此等と同系の分派である。古の薩南軍人族の如きも同系民族の北上せるものとされてゐる。さう言へば此等民族の尙武の氣性は我等が武人の血潮と似通へるものが無いこともない。いはば我々日本人の心底には既に早く南方の呼聲が脈々として流れてゐた譯である。そして、此等の原住諸民族は殆ど一様にマライヨ・ポリネシア語若しくはオーストロネシア語と呼ぶる系統に屬する言語を用ひ、從つ

て狹義の馬來語が今日廣く此等の群島一帯の公用語として或度まで話されてゐるのも當然と言へよう。然し此の所謂馬來語なるものは、此等の島々に於ける諸種の民族の移動と接觸との永い歴史から、多くのサンスクリット語彙と及びアラビア語イラン語ヒンヅミル語

(ベラク州のマライ人)



(ケランタン州のマライ娘)

やポルトガル語等の構成分子を交へ、また近年には和蘭陀語等諸支那語さへ採入れてゐる非常に混淆した語といはれるが、單に言語のみに止まらず、此等の地方の民族・文化・宗教の特徴にも同様な混和と層位が見出されるのである。

半島のマライ族はオラン・マラユ即ち狹義のマライ人で、主として中部及び南部スマトラ島からの移住者だと傳へてゐる。星港(馬來語ではシンガブラと云ひ獅子島の意)は南部スマトラのバレンバン人が西紀一二六〇年來り開いたところ、後一二五二年に至り爪哇の(マジャパヒット)王國の爲に迫はれて北上してマラツカの港町の基を築いた。

人類的には固有マライ人はオセアニア類蒙古種の分枝とされ、その身長は平均一米六で、女子はやく低く、圓頭で鼻は廣く平たく厚い耳をした脚の太くて短い、そして長くて柔かく藍味がかつた黒色の直毛をもち鬚の殆ど無い、暗黄褐色若しくはオリブ色の膚をした住民である。マライ族の文化も半島の他

の原住民である。マライ族の文化も半島の他の原住民と相當相似性を有し、嘗ては海上掠奪に用ひられたかとも思はれるブラフと呼ぶ獨木舟を操り、水上架屋もし、吹管と毒を塗つた投槍とを（尤も今は實際には他の原住民に限されてゐるが）用ひクリス即ち短剣を帶び、サロン（腰巻）をし今は全く廢れたが御



（西海岸の鬪鶏）

齒黒もして居た。そしてバレイ（公會所、會議所）を使用してゐたが、今は王侯に限られてゐるやうである。その傳説中には明かに嘗ては人身御供を行つたことを示す證據も見出される。マライ人の物質文化は島嶼的な特にスマトラ風な性格のもので、ヒンズー文化の影響を受けて移住前に相當高度に開化してゐた。手藝に發達し、織物や冶金術に巧であり、英人の來る以前は象鰐、雞等の型に有餘

る錫を鑄流した通貨を用ひて居つた。陶器も罐轆など使つて作つたりしてゐ、時に麝香として赤鐵礦を用ひもする。竹や棕櫚材の水桶が廣く行はれる。東海岸の産作りとマラツカの榮蘭で編んだ風雅な籠とは巧な細工とされる。また印度や錫蘭に見らるゝやうな水時計が使はれ、ケダー州の鬪鶏などでは水桶にココ椰子の半割にした殻を浮べて置くと十二分で沈むといふ。鶏には二吋半位の鐵双のやうに反りかへつた鉅鐵がつけられる。東海岸では鬪牛が有名で勝負に勝つ爲に星占ひや呪術が行はれ相手を挫くやうにと虎の脂が牡

牛に塗られたりする。

半島には尙ほ上述の主として南部沿岸平地帯に多く住む固有マライ人に依つて山中部や海邊等に追ひやられた先住諸民族がある。

その中のセマンは倭小を以て知らるゝ短頭鬘毛の游牧民族で、身長は男で一、米四九一、女で一、米四〇八位しかなく、膚の色は暗銅色又はチヨコレット色から黒光りするのまであり、鼻は廣く唇は外翻し鬚に乏しい。葉や樹皮で作つた腰帶又は腰蓑をつけ、祝祭には菌の根狀菌絲で作つた黒緒の飾帶を締める。家といつても獸の寢床のやうな岩圍ひした丈のや簡單な圓形又は矩形の樹葉小屋を地上や樹間に設へる。大きい共同小屋掛けをして各個夫それの火所と竹の寢所を有つこともある。屢々頭を剃り齒を磨いて凹形にする。河區では竹筏を使い、武器としては毒矢の弓があるが、北部サカイ人等が之を有つのは大いにセマンから之を借用したものらしく、反對にセマンが今竹製の吹矢を用ひてゐるのは、型こそ異れ、近隣サカイ族から眞似たも



のと思はれる。セマンには酋長の組織體はな
いが各部族毎に頭目がある。犯罪には科料を
支拂はさせられる。部落間の争ひは酋長達が
會合して鎮定する。

サカイ人は人種的には印度の前ドラヴィダ
人の層に屬しコーカシア人の要素を有つ類ヴ
エツダ人種で學問上ヴエツドイドと通稱され
るものである。人に依つては之を印度オース
トラリア種とも呼び、ネグリトより一層
廣くマライ群島に見出されるが今は大部分原
始マライ人と混和してゐて多少體質的區別さ
れるに過ぎない。固有サカイ族は、長頭波狀

毛をした、鼻の美しく小さい頬骨の廣く小
な口と豐滿で突出た下唇とを有つた、通則
として鬘を有たない、平均身長男一米・五〇
四・女一米・四三七位の遊牧種族で、狩獵蒐
集經濟を營み、樹皮の腰巻をし事あれば樹葉
の腰巻をつけ、顔面に黥し身體に塗粧し黥
紋をしたり、時には鼻壁を穿つて豪猪の刺や
金輪などを着し、竹製吹管を武器とし、掘
を穿つて非常に原始的な農耕をして、樹上小
屋とか一時的な遮蔽小屋に住つてゐる。舟も
無ければセマンのやうな竹筏も使はない。吹
管や箭筒などの器具の裝飾は他の原住諸民族
よりもかなり美術的と言
へる。社會組織はセマンの
やうに原始的なもので、部
族の上に全權を有つブン
マ族(頭目)が唯一の職分であ
るが、それも何時もは仲間
の部族員と平等である。ブ
ンフルは世襲で後嗣が無い
時には生前中に繼承者を任

(女)
の部族員と平等である。ブ
ンフルは世襲で後嗣が無い
時には生前中に繼承者を任



(サカイ族ベラク州の男女)

命出來る。殺人罪は死刑に處せられ被害者の
近親が執行者になる。然しこんなことは稀で
ある。竊盜罪も稀放逐に處せられる。土地の
耕作なども家族が單位で個人所有財としては無
い。



春の椿

貴司 山治

つと手帳のはしにしるしとめた。

子規のうたを、唇の邊に呟きて病みて疲れて
眼瞤ちたる顔

ある日、かの女は痰のために窒息しかけた。その時の顔を私はあとになつて何度も思ひ出した。

妻をうしなつてからやうやく一年がすぎさつた。

私は親の死も、弟の死も味はつてゐる。幸ひにして、わが子にわかれるといふ味はひは知らないであらう。

人のいふのをきくと、子よりも妻にわかれることの方が身にこたへるそうである。

私の妻が死床に臥したのは五月はじめであつた。私は旅先からいそいでかへつてきたが、何となく「われひそかにこのたびの妻の病ひいへざるなきやをあやぶむ」と手帳に書いた。そのとほり妻はみるみるうちに悪くなつて行つて夏のところには醫師はもうひそかに私に絶望を告げ、初秋に入ると、みる目もいたいたしく、どう救ひようもないかに思はれた。

かの女は子規を思ひ、子規の「癡一斗へちまの水もまにあはず」などを、その夫の顔をみながら呟くのであつた。私はこんな歌をそ

息がつまりて死ねばどうにもしようがないと頬をふるはせて哭きし日もあり

私は妻を叱りはげまし、かんでふくめるやうに白隠の文章を読んできた。白隠は若い時肺を病んで死の底より甦つた人である。その養生の妙諦を説いた白隠の手紙といふのが世に傳はつてゐる。それはしかし短い文章であつた。

白隠の文をよみきかせ白隠のいはざることまで聲をはげましいふ

子のごとくすなほになりてわが言に聴きしたがはうとつとめるその顔

わが言に聴きしたがひて子のごとくすなほとなりてしづま
れる妻

天命ほとんど盡きんとして心しづまり、冬に入り、お正月を迎へ
ることができた。私は妻とともにその死床に侍して二年を暮らした
ので、生きて迎へる元旦は、涙のあふれるめでたさ、うれしさを覺
えた。日記にこう書いてある。

「早く起きて雑煮を作り、妻に饗す、命ありて元朝を祝ふうれしさ
の故なるべし、妻病ひしづかにして、この日雑煮を食す。」

除夜の鐘が鳴るよとおしへ手を握れば笑みうなづきて少し
涙す

しかし、妻の命の力は元旦を迎へたところですでに盡きたとみえ
て次第に意識が曇つてきて、一月十四日に命終した。その二日前、

刻々にうつゝなくなりめさめざるきみがいのちのいやはて
の夜

息なく、しづかに眠つてゐる妻の顔が次第にかはつてくるのが私
をおどろかせた。

消滅の時のせまれば今はとて聖女のごとく面かはりする
葬送の日の印象は永く心にやきついて

昇天はかくもはげしきもゆる火のさなかにのこすきみが白
き骨

この目をさかひに、私は高い山に棲む獸物が孤獨の穴に入るやう
に、喪にこもつて春を迎へた。天地の恩物はすべてみな還り、妻の
姿のみなく、たゞならぬ思ひで

きみがいのち死床にふせし五月初めまたかへりきて死みど
りなせり

きみがうゑしあけびのつるはのび生ひて老春の苑にその葉
光れり

五月五月かくて一ととせまたすぎなばやがてはきみをわす
るゝをえん

緋の色のちうりつぶの一つ咲きはてて老春の風にいま散ら
んとす

それほどにきみが好かざりし二た色の椿の花がいま咲きさ
かれり

きみがいのちの終りとなりしわが家のみどりの苑に涙をう
づむ

さうして一年がすぎて行つた。まだ忘れられもしない。



隨筆

一

富士

中野 尅子

やつてやれぬ事はナイ

自分がやらすに、外から福運を買ふことだ、授かることだ——と思つて、神様や佛様を祀り上げて、一生懸命に「信心」をやる。そんな信心は、ますます自分の氣力を枯らし、眞の信心の根を絶やして了ふ。

信心といふのは、内から噴き上つて来る力です。あの大きい富士山は、ヨソから土を採つて来て盛り上げたものではない。皆、地の中から噴き上げて、盛り上つた上へ、また盛

一

り上がり、だん／＼高くなつて日本一の高さと、日本一の美しさを形造つたものです。皆、一塵一塊と雖も、悉く噴火して、あの大を築いたものでないものはない。だから、あの偉大さと、美しさを祝ふのです。

「二富士、二鷹、三茄子——」

と云ふ、日本人は仲々藝術的な國民です。そして又、道徳的、宗教的な國民です。此の三つを芽出度いもの、隨一に數へて祝ふ。面白いやありませんか。

私は、其の一富士、二鷹、三茄子といふ意味が、どういふこと知らぬが、此頃非常に感じた事は、東京よりの歸途、列車の中でし

きりに雑誌を讀み耽つてゐた。そしてフツと氣がついて窓の外を眺めた時、目の前に巨人の如く大富士山が突立つてゐた——。

頭に白雪を戴き、紺碧の天空にクツキリと立ち上つた雄姿は、何といふ莊嚴なところか、凛々しいところか。私は、思はず三歎の聲を放つて、いつまでも／＼眺め盡した。いや敬虔な心を以て仰ぎに仰いだ。

私は、それが山であると思へな。日本精神が地から抜け上つて、空へ聳え立つてゐる神像であるかのやうに見えた。これこそ正しく「日本の眞の姿」、「生ける神のみ姿」であると思はれた。

私達は、雑誌の中や、書籍の中に神や佛を

求め、日本精神を究めるが、そんな古ぼけた真の中からは鼠一匹も飛び出さぬ。此の富士山こそは、生ける如來である。生ける宗教である。この富士の眞の「輝ける姿」を仰がぬ者に、どうして宗教がわかるだらう。

私達には、自分の思想の中にも、行動の中に

も、第一此の「氣高さ」が無い——

其の商賣の手口から云つても、金の費ひ方から云つても、どうも穢い、賤しい、黒い。國家の政策でさへ、いつも利のある方へ走り、力と力と相摩ち、自分の力を伸ばすが爲めには、昨日の味方も裏切つて、今日の権力と結び、寝返り打つ事くらひは茶飯事となつてゐる。それを思ふと、内に「富士山」を持つてゐる日本の國は幸ひである。いや誇りである。いつも此の富士を眺めては心を洗ひ、心を奮ひ立たせて、その崇高雄大な理想を世界的に發揮して行くことが出来るからである。

其時、大鷹の天翔けるが如く、天下を睥睨して、北海から南海へ、東極から西極へ、誰と誰かるところなく雄飛する、米國の大も、英

國の猶もこれを逐ふことが出来ぬ。内に「信」の中心のない者は、浮世床の女郎のやうに一夜の内にも誰彼にお愛嬌を賣らんならぬ。そんな奴は、結局、誰からも見捨てられて、裏長屋で貧と病ひに責め立てられて野垂死をする輩である。

富士(信)と——鷹(行)と——茄子(衣

食)とは一貫した信の發展であります。如來精神の發露と活動(信行)、そして其の御恵み(衣食)とは、いつも切つても切れぬ一つの連りであります。昔から「道心の中に衣食あり」と云ふが、信仰やつてゐては食へぬ、信仰をしてゐると損がい——といふのは、本當の「信仰」をやつて居らぬからです。一番初めに云つた御利益信心をばかりやつて、信仰の眞の根本を掴まぬものだから、信仰やるだけやり損になつてゐる。信心とは、自分が信心の塊りになつて打ち込んで行くことであります。自分を「富士山」にしてブツツけて行く。自分が荒鷲、禿鷹になつて飛び込んでゆく——すれば必ず揺かぬものはないのです。金く

らひ儲けることは難作ない、儲かる程の事をやつて居らぬから儲からぬのです。乞食でも怠けてゐる乞食は「貰ひ」が少くない。そんな事は當り前です。

だから「衣食」の爲めに信仰をスルのでないが、「信仰」——なつたら、衣食や、金銭くらひは必ず伴つて来る。伴つて来るのは當り前です。だから——茄子と云つたのは面白い。茄子と奴は愛嬌のある奴で、色は黒くて、形は小さいが、仲々捨て難い味がある。ほしてよし、煮てよし、湯でてよし、漬けてよし、生までよし、揉んでよし、揚げてよし、干して仕舞つて軍需品にすらなる。殊に秋茄子といふ奴は洒落れた奴で問題を起す奴だ。どんな素人が閑地利用で作つてもよく出来、花に一つの無駄がない。一番平民色の豊かな奴だが、其の癖、雲上人にももて囃される、日本色の代表で、幸福な奴だ。正月の景物にまで上り、祝ひの三品にも飛び込む所以が無いのではない。

高く莊嚴なることは富士の如く、低く、卑

しく、角張らぬことは茄子の如く。動かさること大富士の如く、ドッシリ雄大に構へてゐるかと思ふと、神出鬼没、風の如く來つて、風の如く去る、大鷹の如く翔り廻はる敏捷さのあることが『信』です。昨日は十錢に三個の茄子になつて、勝手元の庭先きに轉つてゐたかと思ふと、今日は、百萬金を積んでもビリツともせぬ、富士の如き「大節操」を賣るのが『信』です。

時には子供の玩具にもなる。而し時には八風吹けども動ぜず日本の礎となる。佛の身を以て地獄の衆生を化するやうな自由さ、應變さを無礙に現することが『信仰』です。

時に、茄子になつたり、鷹になつたり、富士になつたり——南洋あたりの無智の土人と語つて、共榮を卜するかと思へば、英米の脅喝を以てしても動かぬのが「日本の態度」です。いつも富士の莊嚴さを以て世界に臨み、鷹の俊敏さを以て世界を壓へ、茄子の卑近さを以て世界を利してゆくのが「日本の理想」です。總てに「仕へる——」心を以て、總て

を率ゐて行く。自ら高しとする者は、他が尊敬しないのです。自分を高く賣る者は、他は買はない。自分を最も低くして賣つてゆく處に、他は高く買ふのです。

だから、先づ、自分を「茄子」の如く低くして仕へてゆく處に他は驕いて來るのです。自分を利するよりも、先づ、相手を利して行く。自分が取るより與へて行く、自分を「種子」にして、彼の「畑」の中に投げ込んでゆくとところに、彼等の肥しを以て、彼等の畑の中に自分が生えるのです。自分を丸々與へて、彼等に「吾れ」を育てさせるつもりにならねばいかぬ。彼等の財、彼等の土まで持つて逃げて來るやうなコソ泥根性ではないかぬ。滿支政策も、南洋開發政策も皆、コレで。佛のやうな慈悲を以て先づ忍び、佛のやうな慈愛を以て先づ恵んで行く處に、頑迷な彼等も終に動く、八紘一字の精神はコレです。富士の如く偉大にして高邁なる精神を持ち乍ら、茄子の如く惨めな姿になつて先づ喰はれてゆくこんな馬鹿な眞似は「信」ル者」でな

くては出來ぬ技です。撃てば、いつでも撃てる鷹の勇を持ちながら、茄子の如き手足も無き無能さ無力さを表貌して屈して行くことは、誰も出來ぬことです。

自ら此の愚、此の拙を爲すところに尊い誇りがあるのです。時には韓信の股くぐりも仕かねまいもの、自ら深く持し、自ら高く擧ぐる信念があればこそ、平氣で、恥かしくもなく出来るのです。見榮坊や、意氣地なしだつたら、たゞでさへ偉らそうな、見上げて貰ひ度いやうな、強がりがして見たいのです。自ら「弱さ」を臆面もなく振り廻はし、平氣で、酒々と列強の間を渡り歩けるのは、日本に深く信ずる「決意」があるのです。

信あるものは無言である。無言であるが、要ある時に言ふが爲めに語を節して置くのである。勇あるものは踊らぬ。踊らぬけれども、一朝、機充つる時は、秋水一閃、敵の首體を忽ちにして兩斷する。仁は智であり、此の仁と智とを備へた眞勇でなければ本當の勇ではない、暴勇であり、蠻勇である。茄子の

智、鷹の勇、富士の仁を具へたものが「信」です。だから、信ある者は、徒らに大を誇らぬし、美を装はぬ。それなのに富士の美は、明けてよし、暮れてよし、雪によし、花によし、月によし、雲によし、仰いでよし、俯してよし、八面玲瓏とあらゆる見ても良い。駿河の富士だ、甲斐の富士だと、人が取り合ひをする。別に、殊更らにお化粧をせぬが濡れてよし、照つてよし、隠れてよし、見えてよし、いつ如何なる時も美しい。それは内に孕む偉大なる「徳」が、自然に輝きとなつて現はれてゐるからです。内に深く藏する「眞」がなくては美は光らぬ。

「信」の無きものが無闇とお化粧したつて、それは美しくも何ともなく醜の上塗りである。美しく見せたかつたら、先づ、眞を求め、善を持するがいゝ、すれば自然に造らずして美、拙かずに褒められる。それが富士の秀麗であり、信の尊容である。

日本には、此の「氣品」がある。これは三千年來持ちつづけ、爲し續けて來た「神の心」

「神の業」が徳となつて具つてゐるからです。威風四隣に振ふと共に、優美に、奥ゆかしい、もの柔かな、みやびかさが一切に現はれてゐるのは、やさしい信の心根が深く内に根差してゐるからです。

人も國も、富士山の如く氣高く、世の鎮めとなり、世界の美の象徴となり、世界を率ゐて、世界を淨化し、世界を幸福にするやうな福、徳、信の具現者にならねばいかぬ。心が瘦せてゐる、信が潤れてゐる。如來の信を勸請し、「如來の人」となれ、「世界の救ひ」となれ。

陸海軍病院慰問淨土

寄附者芳名 (敬稱略)

一圓二十錢	大森區池上本町	竹内山雄
十圓	千葉縣富浦町	和田正系
一圓五十錢	宮城縣亙理郡山下村	藤井
三圓	芝區芝公園八號地	廣度
一圓二十錢	大阪市住吉區我孫子町二二三	辻
五圓	群馬縣新田郡太田町長念寺坂	内野俊亮
一圓二十錢	京都府龜岡町余部	同
一圓五十錢	埼玉縣比企郡野本村下野本	稻村貞雄
一圓二十錢	茨城縣稻敷郡阿見村阿見西郷	渡邊芳江
一圓二十錢	愛知縣碧海郡上郷村國江字郷浦五四	原
一圓	宮城縣亙理縣前	杉浦文治
五圓	鎌倉市扇ヶ谷英勝寺	加藤登志
二圓四十錢	世田ヶ谷區喜多見町慶元寺	成田欽吉
三圓	同 慶元寺坂	門澤隆亮
十圓	大分縣久見町路木	小林觀導
		山田信鏡
		永峰尙元
		上杉ツサ子



蘭印通信

我々は退却するにあたり澤山な油田を破壊せねばならず、いそがしくて退却するひまもない位であった。
(寫眞は破壊に使用せしライター)



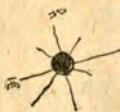
ホワイトハウス地下室
「閣下は只今雜誌社から依頼の原稿執筆中で面會謝絶でございます」

四散米英 敗戦記録

漫畫協團
山崎 善一
和田かつぢ
川口 ケ



シンガポール脱出の英兵
「兄弟、どうやら誰にも感付かれずにすみさうだぜ」



印度洋戦々競々
水雷と
みと
見て
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
果ては
飛魚を
荒鷲と
見では
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
艦と
潜水
鯨を
見
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ
ヒヤリ



第二次爐邊閑話

記者「ハワイの損害は？」
ルーズベルト「撃沈された我が艦が
ハワイ入口を封鎖してゐて、視察が
出来ず、解らない。」
「マニラ陥落の
原因は」
「空軍が
なかつた
からだ」
「米本
土から
何故
助けに
行かなかつ
た」



「航空母艦がないからだ」
「何處でやられた」
「ハワイでやられた」
「こゝで最初へもどる」
(かくて會談數時間を要せり)

アメリカの
將來



ボルネオ戦線
相次ぐ脱走兵に新兵募集
に出掛けたら……
集つたのは猿公
ダケ……

バタシ半島
戦況

「奴は
白旗を持つてゐる
ので元氣がいゝや」



信 仰 相 談 中 村 辨 康

迎歡問質

藥 師 法 と その 信 仰

(問)

隣村に藥師様の御堂が
あります。誰が言ひ出

したのか「戦の神様」として
出征兵士の入營、征途、歸還
の際には必ず祈願したり願ほ
どきしたりします。ところが
此禮儀を作りたいと云ふので
私の處へその世話方が來て
藥師様の紋所はないかと相談
されましたが、私にはわかり
ませんので、聞き合せてから
御返事しますと申して置きま
したが、當地の宗教家の方々
に尋ねて見ましたけれども誰
も知らぬと申します。誠に御
面倒ながら藥師様の紋とか傳
記とか御利益とか御光明とか
云ふものを御教へ下さいま

し。

(答)

(鹿兒島・谷山・志岐生)

藥師様に紋などはありませんが、種
字があります。次に藥師様は藥師如來本願經
などに出て居るところに依ると「藥師琉璃光
如來」と云ひ東方十恒河沙佛土の彼方に淨琉
璃と呼ぶ淨土に居られ、お身體は琉璃のやう
に内も外もすきとほつて光明輝き、その國土
は紺琉璃で阿彌陀如來の極樂淨土に似て居る
と云ひます。

もと菩薩であつた時、十二の大願を立てそ
の願が成就して佛になられたのですが、

一、自身の光明は無量の世界を照し衆生をし
て悉く自分と同じ相好光明を莊嚴させ
て異ることなからしめる。

二、身は琉璃のやうに内外清淨で瑕も垢もな
く光明は日月よりも勝れ、人々をして暗

闇の中に居ても方角は勿論何んな仕事で
も出来るやうにする。

三、衆生に盡ることなき幸福を與へる。

四、他の邪道に居る者をも菩薩道に安立せし
める。

五、戒を満足に行ふことを得せしめる。

六、聲、言、跋、躰などの不具者を始め白癩、
癩狂、其他種々の病氣で惱んで居る者が

若し藥師如來の名を聞き得れば悉く癒
つて皆な満足のものとなることが出来
る。

七、病氣が重くなつて何うしようもなくな
り、其上生活の資糧も藥も無く唯だ死を

待つばかりの者でも藥師の名を聞くこと
が出来たならば、それらの障害はのぞか
れ病氣は平癒する。

八、女人が男になりたいと願ふ場合にも藥師
名を聞くことが出来れば男になれる。

九、間違つた道に入つて脱き差しがならなく
なつた者でも正しさに立ち直ることが出
来る。

相 信 仰 談

ます。この續命法の爲に藥師信仰が支那西藏、蒙古、朝鮮などにも盛んに行はれ

一〇、色々な災難に遇つた場合でもその苦惱から脱却することが出来る。

一一、食物がなくなつて止むなく惡事をしようとするほどにおちぶれた者でも、飽足するほどの食物が與へられる。

一二、貧困で衣服なき者には必要な衣服は勿論その身を飾るところの色々なものが與へられる。

このやうに主として衣食等の生活上の安定と病氣や不具等に對する治癒などが、この佛様の御利益になつて居りますし、また更に重病にかゝつて一旦死んだやうな場合でも、此の人の爲に晝夜六時に藥師如來を禮拜供養し、四十九日を過し、四十九日の五色の幡を作り、この藥師經を四十九遍讀誦するならば、あだかも夢から覺めたやうによみがへつて病はなほり壽命を續け得ると説かれて居ります。この續命法の爲に藥師信仰が支那西藏、蒙古、朝鮮などにも盛んに行はれたのです。我が國に於いては大和法隆寺金堂の本尊藥師如來は、用明天皇様御惱平癒の爲に推古天皇十五年に鑄造された本邦最古の佛像であり、法輪寺の本尊は聖德太子御惱平癒の爲に、また藥師寺の本尊は、天武天皇の勅願で、皇后(持統天皇)の爲に造立されたものであり、興福寺東金堂の本尊及び日光月光の二佛侍は、聖武天皇様が御父、元正天皇様御惱平癒祈願の爲に神龜三年に造られたものであり、その他比叡山根本中堂には、傳教大師自作の藥師像が安置されており、女人高野と云はれる室生寺や教王護國寺などにも藥師様が本尊としてまつられてあります。藥師寺の本尊の如きは紫黑色の金銅で飛鳥朝時代の世界的大藝術作品であります。先年私も拜觀いたしました。が實に素晴らしいもので、いくら見て居ても見あきることのない立派な佛像であります。その外國寶に指定された立派なもの、が各地にあつて古來如何に我が國に藥師信仰が盛んであつたかを物語つて居ります。が、戰には關係がありません。恐らく壽命が

のびると云ふことから「武運長久」の祈りとなつたのかと思はれます。

宗教に藥師法が附隨するのは幼稚な信仰には有り勝なことで、類似宗教は皆な「藥師法」を持つて居ります。佛教の「藥師法」は何時やら此の欄で述べたことがあつたかと思ひますが、類似宗教に云ふやうなでたらめな神秘的なものではなく、大(化學療法)微(物理療法)氣(轉地療法)心(轉心療法)續(理解法)組(信仰的轉心)と云ふやうに六通りのものがありまして、その内の一つだけでは兎角迷信的に墮り易いが、この凡てから綜合されて初めて完全な療法になると云はれて居ります。例へば藥物だけに頼るのも一種の迷信です。し、電氣等の物理療法にはかなりの迷信が加味されて居ります。何事でも一方的になると弊害が出るものですから、藥師信仰にしましても單に信心すれば癒ると云ふやうなものは迷信になります。佛教は凡ての迷信を打破するところに本當のものがあつて居ります。今度の大東亞戰爭も結局米英の物

質萬能と云ふ迷信を打破するのであり、個人主義利己主義個在主義の迷信を打破するのであります。されば今後の宗教家はもつと自分

啞はどうすればよいか

(問) お念佛を申して如来様の御力に依り往生させて頂くことは承知して居りますが、啞などで念佛の申されない者、また一生念佛が申せなかつた者はどうなるのでせうか。

次ぎに私も或る寺で井上圓了博士のかゝれた「大乘十來」を拜見したことがあります。その文句は次の様ですが(文句省略)その典故をお示め願ひたいうございます。

(和歌山・海草・大崎・一文不知)

(答) 啞者など言葉を出し得ない人には手眞似でお念佛のことを話して上げた

ならばよいでせう。こちらの熱心次第で理解させ得ない筈はありません。それには親兄弟のやうな親身の人がいのでせう。また自分の

自身の身の廻りを見つめて反省しなければならぬでせう。薬師信仰の如きも舊來のやうな考へなら是非それを打破して下さいまし。

態度でも教へられると思ひます。謂ゆる身業説法です。親が本當に熱心に宗教を信じて居るならば、日常の行爲や態度にそれがよく判りますから、自然に感化されませう。この場合必ずしも「南無阿彌陀佛」と云ふ聲は出なくともよいと思ひます。聲は心を表現する最低標準ですから、聲の出し得ない人などは身體で念佛すればよろしいと思ひます。但し信なき場合は駄目なことは云ふまでもありません。

懺悔文を唱へるのは虚偽か

(問) お經の句に「煩惱は無盡なれども誓つて斷ぜんことを願ふ」とあり、懺悔文で毎日懺悔しますが、これを唱へ終る

悔文で毎日懺悔しますが、これを唱へ終る

んし、また第二のお質ねの「一生念佛が申されなかつた者」は無論「信」がないのですから問題とはなりません。

次に「大乘十來」のことは別の方の御質ねに御答へした通りです。その答へはあまり高等批判に過ぎたかも知れませんが、これは教訓的ではありませんけれども少くとも信仰的ではありません。道德的ではありませんが宗教的ではありません。若しそれを宗教的なものとするならば「功利的」になつてしまひます。典故は存じません。尚ほこのことに關して江上上人より御注意を頂きましたとを此の機會に感謝いたします。

とまたすぐ煩惱が生じ貪瞋痴に悩まされまゐります。従つて今ではこの偈文を口にするのが何か虚偽を佛様に申すやうで、心苦しくて



仕方がありません。

(青森・東洋輕・油川・大熊有典)

答

佛教では「懺悔告白することに依つて罪も消えて清浄となる」と云ふ建



文が出来、それに廣中略の三種類の文句が出来たのです。今あなたのお賀ねはこ

の懺悔文の中の略文をお唱へになつて居らるところから来て居るものと存じますが、略文だけに一般的であり、その文句の意味が簡單で心の動く範圍が漠然として居り、毎日繰返すことに依つて心の動きにもぶくなるので、たゞ形式だけのやうになり勝なのです。そんな關係からあなたは「何だか虚言を云つて居るやう」に思はれ、心苦しくも御感じになるのでせうが、さればと云つて、それほど敏感なお方であるあなたとしては「ノホホン」にもして居られないでせう。懺悔文をお唱へになるとき、あなたのお心が本氣で懺悔したくないかで、決定しなければなりません。あなたが「これからはもう致しません」と心から懺悔したこと、それは決して虚偽ではないでせう。天野の四郎が懺悔してもく盗みか止まなかつた事實を何うお考へになりますか。天野の四郎の盜癖が止まなかつたことから、彼の懺悔は虚偽であると、誰が苛酷に批評し得るでせうか。彼の懺悔は眞實であり劍眞であつたのです。決して虚偽ではありません

んでした。随つて晩年になつて漸くそれが止まつたのです。則ち懺悔を繰返すことに依つて段々一皮づゝむけて行つたのです。ですからあなたとしても心苦しいと思ひます。懺悔をおつゞけになるのがよろしいと思ひます。法然上人の御法語の「五逆十惡の者も生ると信じて小罪をも犯さじと思ふべし」と云ふ言葉の中で「信じて」と思ふべしとの二つの言葉の意味をよく／＼お味ひになつて、懺悔することに依つて段々お心があかるくなるやうにして頂きたいと存じます。私達は元より凡夫です。一舉手一投足の悉くが貪瞋痴なのです。之は死なない限り離脱が出来ません。否な如來様に救はれない限り死んでも脱けられないことでせう。それはチャンと如來様の方で見通して居られます。ですから唯だ懺悔する時のあなたの御氣持が虚偽か虚偽でないかを御吟味になつて、もう少し心を廣やかにをお持ち下さるやうおすゝめいたしますと共に、それを基として尙更に念佛に精進するよすがとして頂きたうございます。



元祖大師
四十八靈場

巡拜順路記

所要日數——岡山基點十七日間

平壤府華頂寺 中川大仙記

ここに縁熟して中田勘一氏と二人にて元祖大師四十八靈場全部を巡拜いたしました。原則として二人は巡禮姿を致し、禁酒禁煙、旅館も第三流以下として、神宮(伊勢、樫原)桃山等の参拜は勿論缺きませんが、先づ靈場外は一切横道を取らぬこと、その代り一靈場一時間以上ゆつくり参拜、讀經念佛。

幸ひに一順路の實行をなし得て嬉しくてたまりません。一般に紹介して同心の友に御参考に致し度、熱望の餘りここに順路記だけを認めました。

祈

天皇 無窮 皇威 宣揚
皇軍 將兵 武運 長久
戰歿 勇士 追善 菩提

第一日 誕生寺泊り

第一番 誕生寺

岡山縣久米郡
岡岡南

縁起 法然上人御誕生の靈地
交通 山陽本線岡山下車

中國線岡山——誕生寺驛(四三キロ九八錢
一時間三十分)誕生寺驛より西方五丁

縁起 九歳より十五歳までの修學の靈場にて國寶

にも類すべき勢至九尊像安置せらる
境内に大銀杏(全長十丈)天然記念物指定あり

第二番 菩提寺

第二日 誕生寺泊り

第三番 岩間寺

岡山縣久米郡
吉岡村

交通 誕生寺——津山(五・二キロ 三十五分)津山
——關本間バス(六里 一時間)更に山道十五
丁

丁

縁起 御兩親參籠せられし靈場
交通 誕生寺より東北五十丁
山道にて案内者を要す
上り所要時間二時間

第四番

法然寺

香川縣佛生山町

緣起 七十五歲満居の御御在住地
交通 誕生寺 岡山 宇野 (三二・九キロ
一時間)

宇野 高松(二五キロ 一時間)
市電 琴平鐵道(二十分間)
佛生山驛下車南へ約十五丁

第三日 淨運寺泊り
第五番 專稱寺

香川縣仲多度郡
鹽飽本島笠島

緣起 御流満の砌最初御着船の靈地
交通 高松驛 丸龜驛(二八・一キロ 一時間)
丸龜市福島乘船(毎日五回) 鹽飽笠島上陸約五
丁

第六番

淨運寺
兵庫縣丹波郡
室津港

緣起 御配流の砌遊女教化の靈地
御自筆名號等の寶物貝掘の井戸あり
交通 笠島乘船下津井上陸、下津井 茶屋町(三
キロ 五十分) 茶屋町乗換 岡山(一五キ
ロ 三十分) 岡山 姫路(八八キロ 二時
間) 下車 姫路 室津(バス七里)

第四日 大阪泊り
第七番 十輪寺

兵庫縣加古郡
高砂町

緣起 御配流の砌漁夫御教化の靈地
交通 室津港 姫路(バス一時間)
姫路 高砂(兵電三十分十七キロ三五錢) 約
三丁

第八番

名號庵
神戸市川中町

法然上人名號庵

緣起

御直筆名號石安置
御配流の砌御留錫水陸無遮の供養を修し給
ひし靈地

交通

高砂 兵庫(四〇キロ 一時間十分四十五錢)
兵庫驛より約十丁

第九番

阿彌陀寺
神戸市脇が濱町

緣起

御左遷地四國より御歸途御着船地
御手植法然松有り
交通 名號庵より約三丁。市電今出在家 春日町
下車約五丁

第十番

如來院
兵庫縣尼ヶ崎市
寺町

緣起

御左遷の砌遊女御教化の靈地
交通 阿彌陀寺より五丁
阪神春日野道尼ヶ崎下車(三二キロ四三錢)
約三丁

第五日 大阪泊り

第十一番 勝尾寺
大阪府三島郡
豊川村

緣起

御配流よりの御歸途四ヶ年御留錫の靈地
二階堂
大阪 石橋驛 池田行特急電車のりかへて
石橋驛 箕面下車(二四・八キロ三二錢)
山道五十丁本堂の奥にあり

第十二番

天王寺念佛堂
大阪府天王寺

緣起

大阪天王寺御參詣の砌念佛御修行遊はされ

大阪市天王寺區
元町

第十三番

一心寺

大阪市天王寺區
逢坂上之町

第六日 高野山泊り
第十四番

報恩講寺

和歌山縣海草郡
加太町大川

第十五番

高野山圓光

大師御廟

和歌山縣伊都郡
高野山管理熊谷寺

なる靈地
交通 市電天王寺西門前下車

緣起

後白川法王鳳輦をこゝにとめさせ給ひ、大師親しく難波瀉西に入る日を眺むれば、よしあし共に南無阿彌陀佛の御歌を頂か

交通

天王寺より約三丁

緣起

配所より御歸路海上波荒く一時御寄港加太浦入御教化の靈地

交通

大阪—深日(南海本線)六四キロ 九六錢
深日—小島(バス三十錢)より約十丁

緣起

大師が奥之院に五輪の石塔をたて御自ら「源空」と刻んで置かれたのを、大師滅後弟子達は、御分骨をこの塔下に納め奉る

交通

深日—和歌山 橋本—(四三キロ)—高野下
十一(〇キロ)—極樂橋—(二〇キロ)—高野山(〇・八キロ)

女人堂まで十四丁更に奥之院迄三十六丁熊谷寺は奥之院入口

第七日 當麻泊り
第十六番

高野山

和歌山縣伊都郡
高野山

第八日 山田泊り
第十七番

當麻 奥院

奈良縣北葛城郡
當麻村當麻寺山内

第十八番

光明寺

奈良縣高市郡
高取土佐町

第十九番

法然寺

奈良縣磯城郡
香久山南浦

第二十番

東大寺指圖堂

奈良市雜司町
大佛殿西隣

緣起

俊乘房重源、熊谷蓮生房等不斷念佛を修行したる靈蹟

交通

熊谷寺より裏山道約十丁

緣起

知恩院の奥院と稱する由緒あり
高野山—橋本—高田(三四キロ一時間)
和歌山線—橋本—高田(三四キロ一時間)
大鐵電 高田—當麻下車西三丁

交通

和歌山線—橋本—高田(三四キロ一時間)

緣起

名残りの尊像安置
當麻—壺坂下車約三丁

交通

當麻—壺坂下車約三丁

緣起

大師橋寺へ御巡拜の砌この寺に御留錫、御教化の靈場

交通

壺坂—小房下車二十丁

緣起

大師大佛勸進の要職に補せられ給ひしを拜辭俊乘坊を推舉し給ふ。
香久山—耳成十五丁

交通

第九日 堀ノ内泊り

欣淨寺

宇治山田市
一ノ木町

第十日 敦賀泊り

櫻ヶ池

應聲教院

靜岡縣小笠郡
中田村

第十一日 京都泊り

本願寺

京都市熊野郡
久美濱町古神谷

第十二日 京都泊り

青龍寺

耳成八木
八木西大寺(二〇キロ)
西大寺 奈良(四・五キロ)
四十八錢

緣起

皇大神宮參籠の砌の靈地

交通

奈良八木 一〇三キロ二圓五錢

山田驛より北四丁

緣起

皇國阿闍梨入水の櫻ヶ池

交通

山田一名古屋(關急一〇八キロ一圓七十五錢)。名古屋(東海道線)堀ノ内(二四三キロ)。堀ノ内、櫻ヶ池(バス五十分一七キロ五十五錢)。應聲教院(バスにて)。應聲教院掛川驛(バス三十分)

緣起

大師一夏九旬安居遊ばされし靈地

交通

掛川米原(二二キロ)米原敦賀(四八キロ)敦賀舞鶴(九一キロ)舞鶴久美濱(七二キロ)下車約八丁

緣起

御開宗まで二十六年御修行究學の靈地

交通

久美濱豐岡(二二キロ)豐岡福知山(六〇キロ)福知山綾部(二二キロ)綾部京

滋賀縣滋賀郡
比叡山元黒谷

第二十五日 勝林院

京都府愛宕郡
大原村大原

第二十六番 法華堂陵

京都府愛宕郡
大原村大原

第二十七番 月輪寺

京都市右京區
嵯峨町月輪

第二十八番 清涼寺

京都市右京區
嵯峨町

都(七七キロ)京都三條濱大津、濱大津、坂本

坂本よりケーブルカーにて登山

根本中堂大講堂戒壇院等を経て二十丁

大原問答の行はれし靈地

青龍寺より山道下り十五丁

八瀬着三千院前(バス五・五キロ)下車約三丁

緣起

八十二代後鳥羽天皇の大原法華堂陵

勝林院本堂前東側

緣起

九條兼實公隱棲の寺、境内に時雨櫻あり

交通

四條大宮嵐山(二十分往復一圓)

嵐山愛宕(十一分十五錢)

ケーブル二二三〇米(十一分五十錢)頂上より右方下り十五丁

緣起

御歳二十四歳の御折當寺に參籠遊ばさる

交通

月輪寺より下り徒歩三キロ

愛宕電車釋迦堂下車約三丁

第二十九番

二尊院

京都市右京區嵯峨町

緣起 釋迦堂御參籠の御御留錫の靈地
交通 清涼寺西門より約二丁

第三十番

西光寺

京都市右京區太秦多藪町

緣起 御遺骸を留め御舍利を納め奉る塔あり
交通 釋迦堂—太子前(嵐山電車)下車一丁

第三十一番

源空寺

京都市伏見區瀬戸物町

緣起 大佛殿落慶供養の御歸途御留錫の靈地
交通 京阪三條—桃山大手前下車
大手筋西へ三丁右へ曲り右側一丁

第三十二番

一念寺

京都市伏見區下鳥羽三町

緣起 御配流の御乗船し給ひし靈地、大佛一念寺とて有名なり。丈六の阿彌陀佛は鳥羽の大佛と稱す
交通 大手筋更に西へ十五丁國道を左へ二丁右に曲り一丁川岸にあり

第三十三番

光明寺

京都市乙訓郡乙訓村栗生

緣起 茶毘所の跡には勢至菩薩の石像安置せられてあり
交通 一念寺より約二里徒歩平坦な道
歸途—山門—西日向町バス三キロ

第十五日 京都泊り

第三十四番

青龍寺

京都市東山區八坂南町

緣起 大師六時禮讃念佛修行し給ひし靈地
交通 東山線北門道下車
高臺寺總門南側

第三十五番

清水寺

京都市東山區阿彌陀堂

緣起 說戒念佛勸進の御遺跡
交通 東山線五條坂下車五丁
觀音堂を拜し奥之院に至る
中間に阿彌陀堂あり

第三十六番

後清閑寺陵

京都市東山區清閑寺山之内町

緣起 高倉天皇御陵
交通 清水寺より南へ約六丁

第三十七番

正林寺

京都市東山區上馬町

緣起 平重盛公燈籠堂の舊蹟
交通 後清閑寺陵より下り五丁にて當寺門前に至る

第三十八番

三十三間堂

京都市東山區七條大和通路

緣起 後白川法王第十三回御忌淨土三部經書寫の法要を修し給ひし靈地
交通 正林寺門前東山線澁谷乗車 今熊野下車約二丁

第三十九番

法住寺陵

京都市東山區
七條大山大路緣起 後白川天皇御陵
交通 三十三間堂と道路を隔てた東側約二丁

第四十番

月輪公廟所

京都市東山區
東福寺山内緣起 月輪禪閣九條兼實公御廟所
交通 東山線東福寺前下車東五丁

第十六日

第四十一番

法然寺

京都市下京區
寺町佛光寺上る緣起 熊谷蓮生房の創建
交通 市電四條寺町下車南へ二丁

第四十二番

誓願寺

京都市中京區
新京極六角緣起 藏俊僧都の住せられし寺にして、大師を仰
交通 いで中興開山とし給ふ
市電河原町三條下車西南二丁

第四十三番

光照寺

京都市東山區
山科町日ノ岡緣起 源義仲京都亂入の一日この所に避け給ふ
交通 京津線三條一日の岡下車西南約二丁山手にあり

第四十四番

法然院

緣起 別寺念佛を修し給ひし靈蹟
交通 日ノ岡より京津線にて三條へ戻り、市電に京都市左京區
鹿ヶ谷

第四十五番

知恩寺

京都市左京區
田中門前町緣起 勅傳第六にあるか茂の河原屋の靈地
交通 銀閣寺乗車―百萬遍下車

第四十六番

清淨華院

京都市上京區
寺町廣小路上る緣起 清和天皇御創建、慈覺大師初代住持に任じ
給ふ。高倉天皇大師に勅授遊ばさる
交通 百萬遍乗車―河原町通白梅圖子下車

第十七日

第四十七番

金戒光明寺

京都市左京區
黒谷町緣起 元白川の禪坊と稱へた。大師は截空上人よ
り譲り受けられ念佛御化導遊ばさる
交通 白梅圖子乗車―岡崎通下車北へ一丁

第四十四番

知恩院

京都市東山區
林下町緣起 淨土宗開宗念佛弘通遊ばされし靈地
交通 岡崎通り乗車―東山通り知恩院下車「元祖大師四十八靈場巡拜順路記並に略緣起」を左記へ御申込
次第贈呈します。

朝鮮平壤府大和町華頂寺 中川 大仙

て銀閣寺終點下車東南五丁



大詔 宗教報國全國大會

二月八日 九段軍人會館で開催

佛教、神道、基督教とわが國全宗教界を擧げての大詔奉戴宗教報國全國大會が二月八日午後二時から東京九段軍人會館にて盛大に催された。これよりさきに、淨土宗では全國から選拔された檀徒約百名が同日午前十一時に芝區芝公園淨土宗務所に集合し、管長郁芳隨圓親下導師のもとに詔書奉讀、聖職必勝祈願會を厳修し、管長親下より告示があつてから、午後零時三十分管長親下を先頭にして一同揃つて同所を出發、先づ宮城前に到り皇居を拜し、次いでそのまゝの行進で軍人會館に入つた。

すでに定刻の午後二時には全宗教界の代表者千五百名によつて軍人會館は満員の盛況をみせ、宮城遙拜、國家齊唱、默禱、詔書奉讀の順序によつて會が進められ文部大臣、情報局長の挨拶があつてから、陸海軍將兵への感謝決議、左記宣誓をなして午後四時過ぎ盛大裡に解散した。尙宣誓文は次の通りである。

宣誓

一、大詔ヲ奉戴シテ必勝ノ信念ヲ堅持シ 聖旨ヲ宣布シテ國民ノ志氣ヲ昂揚シ億兆一心國家ノ總力ヲ擧ケテ萬違算ナク謹

ミテ 皇祖皇宗ノ神靈ニ答ヘ奉リ恭シク 陛下ノ御信倚ニ報イ奉リ以テ大東亞聖戰ノ目的ヲ完遂セムコトヲ期ス

一、米英兩國ノ唯物的思想ト侵略的ノ非望トヲ破碎シハ絃爲宇ノ宏謨ニ則リ物心一如ノ信仰ニ基キ大東亞ニ於ケル諸民族ノ解放ト共榮國ノ發展トニ寄與シ以テ皇國ヲ中核トスル道義的世界秩序ノ建設ニ貢獻セムコトヲ期ス

特志寄附者芳名

左記の如く護法諸天四恩報答のため本會活動資金にと特志寄附下されました。

一金拾圓也

中支派遣六、一一六部隊

青柳永一殿

釜山知恩寺支部の心身鍊成結果

朝鮮釜山府大廳町知恩寺本會支部では二月四日から八日まで銃後青年の資質鍊成と聖業完遂の信念を強化するために衆中心身鍊成青年中心共生結果を行つた。

龍興院の戰勝祈願會

本所區横川橋龍興院法會本會支部では一月二日戰勝祈願の法要を執行し、終つて金田明進師の講演、大津理陽師のお話を聴き、種々餘興があり盛會裡に散會した。尙同會は町内青年團在郷軍人等を打つて一丸とした修養團體で當日も百五十餘名が參集盛大であつた。



法語
解説

易行道から死生達観へ

法然上人法語 (其四)

中村 辨 康

法語

淨土門じゆんとといは、この娑婆世界しやばせかいをいとひすて、いそぎて極樂ごくらくにむまるゝなり。かの國くににむまるゝ事は阿彌陀佛あみだぶつのちかひにて、人の善惡ぜんあくをえらばず、たゞほとけのちかひをたのみたのまざるによるなり。このゆへに道綽だうてつ(禪師ぜんじ)は、淨土じゆんとの一門いちもんのみありて通入つうにふすべきみちなりとのたまへり。さればこのごろ生死しじをはなれんと思はむ人は、證ししやうしがたき聖道せいだうをすて、ゆきやすき淨土じゆんとをねがふべきなり。この聖道淨土せいだうじゆんとをば難行道なんぎやうだう易行道いぎやうだうとなづけたり。たとへをとりてこれをいふに、難行道なんぎやうだうは、けはしきみちをがちにてゆくがごとし。易行道いぎやうだうは、海路かいろをふねにのりてゆくがごとしといへり。あしなえ、目しわたらん人は、かゝるみちにはむかふべからず。たゞふねにのりて向ひのきし

にはつくなり。

しかるに、このごろのわれらは、智慧ちゐのまなこしめ、行法ぎやうぽうのあしなへたるともがらなり。聖道せいだう難行なんぎやうのけはしきみちには惣じてのぞみをたつべし。たゞ彌陀みだの本願ほんがんのふねにのりて生死しじのうみをわたり、極樂ごくらくのきしにつくべきなり。

もし智慧ちゐをもて生死しじを離るべくば、源空げんくう(法然上人ぽうねんじやうにん自らのこと)何ぞ聖道門せいだうもんをすて、この淨土門じゆんともんにおもむくべき。まさに知るべし。聖道せいだうの修行しやうぎやうは智慧ちゐをきはめて生死しじをはなれ、淨土門じゆんともんの修行しやうぎやうは愚痴ぐちにかへりて極樂ごくらくにむまると。

和語燈錄 法語抄一三 一六

解説

一般に理想の世界を「淨土」と云ひ、現實の世界を「穢

「士」または「娑婆世界」などと云つて居りますが、娑婆と云ふのは「堪忍」または「忍」と翻譯すべき梵語で、こゝに住む人々は何事にもよく忍耐しなければ生活して行けないからであります。だからよく「苦の娑婆である」などとも云はれるのです。また穢土と云ふのは淨土に對する言葉であつて、維摩經の「その心きよければその土きよし」と云ふのと反對に、人々の心が濁つて居るから「穢ある土」としたまでのもので、釋淨土群疑論には

一、體淨相穢 本體は淨い世界ではあるが、その外形が穢ない。

二、體穢相淨 外形はきれいに見えるが、その本體はきれない。

三、體相俱淨 本體も外形も俱にきれいだである。

四、體相俱穢 本體も外形も内外共にきたない。

の四種の世界を擧げ、第三の淨土に對して三種の穢土があることを説いて居ります。ですから私達の住んで居る國土そのものの問題ではなくして、私達住民の心の問題なのです。つまり心が濁つて居るから、その住民の世界も濁惡であるとして穢土と云つたのであります。

謂ゆる「五濁の世界」を云ふのです。阿彌陀經に「娑婆

國土の五濁惡世の劫濁（時代の濁り）見濁（思想の濁り）煩惱濁（本能的欲望の濁り）衆生濁（社會民心の濁り）命濁（生活上の濁り）の中に於いて」と云つて居りますやうに、國そのものを云ふのでなく、人心の穢れを指して「穢土」と稱するのであります。

であればこそ、信仰に依つて心が淨くなればこそ淨土への「救ひ」が完成するのであり、淨き世界へ更生するとも云はれ得るのであります。

然しながら自ら「心が淨くなる」ことは中々容易でありません。つまり個人の力では出来ない相談なのです。何うしても社會の力、國家の力、否なむしろ宇宙正義の力なくては到底不可能なのです。この故に大宇宙意志力の綜合態である阿彌陀の大誓願力を待たねばなりません。それをいま「たゞほとけのちかひをたのみ」と云ふのであり、その願力に乗することを「極樂淨土に生れがはる」とも云ふのであります。

それは「年」が行をするのに汽車に乗るやうなもので、貴賤貧富の差別なく乗車切符を手にしさえすれば、何の苦もなく目的地に行き着き得るのと同様に、善人であれ惡人であれ、一とたび佛の本願を頼み、如來に南無し得る

れば、本當の死生觀に達したとは云へません。ですが、それは聖道門の教では心證し難いことです。即ち哲理を學び道徳を精進する聖道門では、成る程理窟ではわかつたやうでも感情が承知して呉れません。ですからそんな哲學究明の方法は捨て、端的に歸命して「我が全分」をまかせ切る淨土の信仰に入るのが最も適切妥當な良法であります。

阿彌陀は生命の根元であります。だからこの生の根元に突入する「阿彌陀への歸命」こそは、誤まつた死生觀から離脱の出来る最善の方法であり、これのみが私達に與へられた通用門であります。

またこの聖道門の教を難行道と云ひ、淨土門の教を易行道と云つて居りますが、聖道門の教は高遠な哲理を學んで智慧を磨いた上に、更らにそれを我が物とする爲に幾多の行法を修練しなくてはなりません。それは丁度けはしい山坂を徒歩でよち登るやうなもので、言はゞ難行苦行をしなければなりませんから「難行道」となづけるのであります。これに反して淨土門の教はたゞ彌陀の本願を信じさへすればよいのですから、たとへ智慧の眼がなくとも、また行法の足が動かなくとも、唯だ強力な本願力に引かれて、やす／＼と生死煩惱の海をのり切るの「易行道」と言ふ

のです。多くの人の中には「信」は中々困難で、容易に入信が出来ないから、やつぱり「難行道」であると云ふ人もあります。無論阿彌陀經にはお釋迦様も「難信の法」だと言つては居りますが、それは淨土門が難信の法ではなくして、人々の心がかたくなで信じようとしても何處かに心がひつかゝつて居て信じ切れない有様であるから、その事實上のやくざな人々の心を察して「難信」と云つたまでのものであります。「信する」と云ふことは困難なやうですが、實は何でもないことです。子供のやうな素直な氣持になればよいのです。子供は大人の言ふことなら何でも信じます。ことにとうさまやお母さまの言ふことならば、それがよしとへ間違ひであつても直ぐ信じ込んでしまひます。ですから素直な人に取つて「信」と云ふものぐらゐ簡單なものはありません。

信は一に「孝順心」とも云ひます。子供のやうな孝順心です。素直に信順する心です。親は決して子供をだまして居るものではありませんから、それが充分にわかつて居る子供としてはたとひうそでも親の言ふことには絶対信頼が出来るのです。

信としてはそれでよいのです。

親鸞上人が法然上人の言葉に絶対信頼して「たとへ法然上人にすかされまゐらせて」地獄に墮ちてもさら／＼悔ひはない、もと／＼「地獄一定」のもので、外に救はれやうのない身であるから、よし念佛が地獄行きの爲の教であつてもなくても、それで「救はれる」と聞きそのすゝめに出つた限りに於いては、それを信ぜずにはおられない、況して佛言に嘘はないのであるから佛言を信じた善導大師の言葉に偽りがあらうとは思はれないし、善導大師に依つた法然上人の教へにも偽りがあるとは思はれない。だから決して間違ひはないと固く信ずるのであると、言はれて居りますやうに、素直になつて信のおける人の言葉をそのまゝ受け入れたらよいのです。是れ「人に就いて信を立てる」と云ふもので、一番簡單明瞭なものであります。

それをあゝでもない、かうでもない、自分のくだらないせまい経験範圍での理窟で、こねくり廻すのですから出来そこないの牡丹餅見たやうなものになつて、煮ても焼いても食はれないものになつてしまふのです。自分を餘りにも買ひかぶり過ぎて居るからです。アメリカのルーズベルトやハル長官見たやうなもので、自分の不確かな認識で日本の「忍耐にも限度がある」と云ふ言葉を信ぜず、圖に

のつて一層我が儘をこねくつた爲に、ドカンとやられて、今更ら後悔しても追ひ付かないやうに、ともすれば役にも立たない屁理窟が飛び出して、自分の本心の「信じたい」氣持を押さへつけて、素直な氣持にならせないのが私達の惡癖なのです。だからこそ「難信」とも云ふのですが、實は難信でも何でもありません。易信であり易行であります。信仰に理窟はいりません。くだらない理智などはいりません。信に入れば、そこからグングン理智は湧いて來ます。智慧と慈悲とは阿彌陀佛の徳性ですから、智慧圓滿の信に突入すればよいのです。それからあとに理智を働かせたらよいのです。若し智を以て死生を達観することが可能であるならば「源空なんすれぞ聖道門を捨てゝこの淨土門に趣くべきや」と大聲叱呼して居る法然上人の言葉を解釋すべきでありますか。智慧第一の法然房と云はれた人にして既に理智を捨てられたではありませんか。理智は到底死生を達観することは出来ないことを痛感せねばなりません。まして私達のやうな智慧のない愚か者が、今更ら理智を以て信仰を批判せんとし、少しも信の孝順なく、執拗に信を拒否しようとして居る態度は、何と云ふ淺ましい姿でせう。此處に大反省する必要があります。反省すれば必

す心の轉換がある筈です。

私達には六波羅密とか四攝法とか三十七道品とか云ふやうな「行」に對する力量はありません。總じてこれらの行法には絶望なのであります。戒の中の一つでさへ録にたつことは出来ません。うまいものは食ひたいし、樂はしたいし、横着はしたいし、何一つ満足にやれもしない癖に「念佛なんて可笑しくつて出来るか」と云つた態度で、死生達觀も大悟徹底も出来る筈がありません。

人間はあまり利巧ぶるといけません。利巧馬鹿と云つて遂には失敗するものです。

昔、夫婦喧嘩ばかりして居る家があつたさうです。その主人が隣の家では大勢の家内でありながら何時も睦まじく家業にいらして居るのを見て、何かいゝ和合の方法はないかと思つて

「私の家は夫婦かけ向ひの小人數でありながら毎日朝から晩まで喧嘩ばかりしますので、私も遂おもしろくない爲に仕事にも精が出ず、従つてくらしにも困つて居ます。然るに御宅様は多人數なのに始終和氣霽々と、こやかにおくらしの御様子は誠に羨ましいことでございます。何かよい和合の方法でもありますならば御教へを頂

いて、私の處でも一家おつまじく暮したいものと存じますが……」

と質ねると、その主人が

「イヤ私のところはみな馬鹿ばかり揃つて居りますからそれで喧嘩をしないのでございます」

と答へたと云ふ話があります。聖道門の教はその夫婦二人暮しの家のやうな理窟をこね淨土門の教は「馬鹿ばかり揃つて居る」と云つた人の家のやうに、愚痴にかへつた素直な氣持で、如來を仰いで居るのであります。

「詔を受けては必ず謹め」と聖徳太子は十七條憲法の第三條に仰せられて居りますが、それが取りも直さず淨土門の態度なのです。またその第十條には「共にこれ凡夫のみ」とおつしやつて居られますが、この氣持の徹底こそ一億一心、大詔のお示しのまゝに此の重大時局をのり切る心的基礎であります。

此の非常時局下に理窟はいりません。唯だ一意専心、仰せのまゝに従ひ、それ／＼の任に盡くすのみであります。

「諸上善人俱會一處」

利巧ぶらず一億一心たるところ、そこに既におのづから淨土の信が顯現して居るではありませんか。

編輯後記

◇朝に夕に皇軍の赫々たる戦果が次々に傳へられて來ます。實に驚くべき大戦果であり、今更ながら感嘆するの外ありません。

◇しかし戦果が大きければそれだけまた、前線將士の勞苦の並々ならぬことに思ひをいたし、深く感謝せねばなりません。いづれその内に生死を超えた鬼神を泣かす数々の武勳も傳へられて來てゐます。その話に奮ひたいといふ大東亞共榮國の建設に邁進しませう。戦ひながら建設してゆくことを怠つてはなりません。

◇昔は戦ひが劇的なもの、感動的なものとしてのみ傳へられ、また開かれ勝ちであつたが、今は斯様にかけ離れた存在としてはあり得ません。シンガポールが陥落してお祭りみたいな祝賀の行事は絶対に

禁物です。ある新聞の論説に「戦争は見世物でない」とありましたが、當然すぎる話です。

◇各隣組で相談しては防空訓練を盛んに演つてゐます。訓練に訓練を積んでこそ初めて必勝の信念がわくもので、今後とも猛練習が必要でせう。前線では戦争の合間の僅かな時間を利用して訓練を行つてゐることを思へば、例へ敵の空襲下にさらされてゐる際にすらこの訓練を續行することを忘れてはなりません。

◇以前は物質的な生活を豊富にすることがよいこととされ、精神的な生活方面が等閑に附され勝ちであつたため、段々贅澤になり、これが生活の向上かのやうに思はれてゐました。

◇そして今になつて生活を最低限度に切り下げることの絶対必要なのを知つてゐながら、實は仲々實現され難いやうです。餘分なものを極力切り捨て、ゆきませう。

◇吉田綾二郎先生は相變らず御元氣一杯で御活躍です。お慶び申し上げます。

◇佐藤春夫先生から久し振りに玉稿を頂き深謝いたします。阿彌陀さまは必ず書くとお申されてありますが、また本號のやうな短篇も引續きお寄せ下さるとのことです。◇貴司山治氏からお忙しいところを身邊隨想を頂き厚く御禮申し上げます。

◇中川大仙氏の「巡拜順路記」は同氏自身の巡拜を感激のまゝ記したもので、どなたにもよい参考とならうと思ひます。

◇本誌は會員各位に原價にてお頒け致してゐる次第ですが、若し郵税が値上げされるやうな場合には會費一年一回二十錢も値上げさせて頂くかも知れません。何卒御諒承下され、引き續き御愛顧の程願ひ上げます。

淨土 三月號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可昭和七年二月五日印刷納本
昭和七年三月一日發行

(定價十二錢)

東京市芝區芝公園十五號明照會館

編輯兼 眞野正順
發行人

東京市芝區芝公園十五號明照會館

印刷人 赤尾光雄

東京市牛込區堀町七

印刷所 大日本印刷株式會社

配給元

東京市神田區渡路町二ノ九

日本出版配給株式會社

發行所 法然上人讀印會

東京市芝區芝公園明照會館内

振替東京二一八七番

「淨土」購讀規定

一部定價 金十二錢

(送料一錢)

會費 金二圓二十錢

一ケ年 (送料共)

腦の病・神經系統諸症・神經痛
腦溢血・鼻・耳の病・不眠症

綜合的優秀藥

光明丸

主治 效能

腦神經系統諸病、神經病、腦神經衰弱、不眠症
てんかん、腦膜炎、ヒステリー、（小麻痺）（ヒキ）（ツケ）腦
梅毒、梅毒、腦溢血、半身不隨、心悸亢進症、
逆上、耳鳴、腦貧血、頭痛、鬱血、（肩首コリ）
神經性（耳病）、神經性（鼻病）、記憶力減退、
思考力減退、精力減退、健忘症、性的神經病一
切、神經性變屈症、小心恐怖症、恐迫觀念、憂
鬱症、誇大妄想、取越苦勞、雜念妄想、多夢症
胃腸障害、便秘症、神經痛、ロイマチス、關節
炎、以上ノ諸病ニ用ヒテ著効アリ

價 藥			
六	十	廿	卅
日	日	日	日
分	分	分	分
貳	參	五	七
圓	圓	圓	圓

全國有名藥
店・一流百
貨店ニアリ
品切ノ節ハ
直接本舗へ
御注文下サ
イ

試供藥と
説明書を

進呈

京都伏見いなり山
謹製領藥元 願 成 閣

關西代理店 大阪 合資會社 丹平商會分店
關東代理店 東京 株式會社 丹平商會支店

昭和十年五月廿日第三轉郵便認可（毎月一回一日發行）
昭和十七年二月廿日印刷納本、昭和十七年二月一日發行

淨 土 第八卷第三號

（印） 定價金十二錢（送料）
外埠定價金十三錢